

令和4年度

新座市教育委員会研究委嘱

研究2年目



研究主題

主体的・対話的で深い学びの創造

～ICTを活用した授業実践を通して～

研究の歩み



新座市立新開小学校

1 研究の全体構想

目指す児童像

- ◎主体的…知識や技能、学習意欲を伸ばし続けようと自律的に学習している。
- ◎対話的…意見や気持ちを伝え合い、力を合わせて協働的に取り組んでいる。
- ◎深い学び…自律的な学習、自他理解など様々な学びを通して、**学習観**を更新し続けている。

【資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける子】

研究主題

主体的・対話的で深い学びの創造
～ICTを活用した授業実践を通して～

学校教育目標

かしこい子 心ゆたかな子 たくましい子

社会的背景

◆個別最適な学び、AI がもたらすユビキタス社会の到来、人口・気候変動・食料・エネルギー・ウイルスなどの地球環境問題、人種差別・誹謗中傷などの人権問題、経済状況からくる格差社会など、世界情勢は目まぐるしい変化である。この変化の中で、求められる力を以下の4点としてまとめた。

- ①「知識」と「技能・スキル」をバランスよく身に付け、深い思考活動につなげられる力
- ②学ぶことに対する「態度や価値観」を強くたくし、継続的に学びに向かおうとする力
- ③多様な環境に触れながら、社会に視野を広げ、自らの人生のビジョンを磨いていこうとする力
- ④多様性を肯定し、自分の特徴を生かした個性豊かな心を育てていく力

つまり、先行き不透明な時代を生き抜いていくためには、**【生涯に渡って、他者と協働しながら主体的な学習者（もしくは働き手）として活動し、自らの能力を伸ばしていく力】**が社会的背景から求められている。

研究仮説

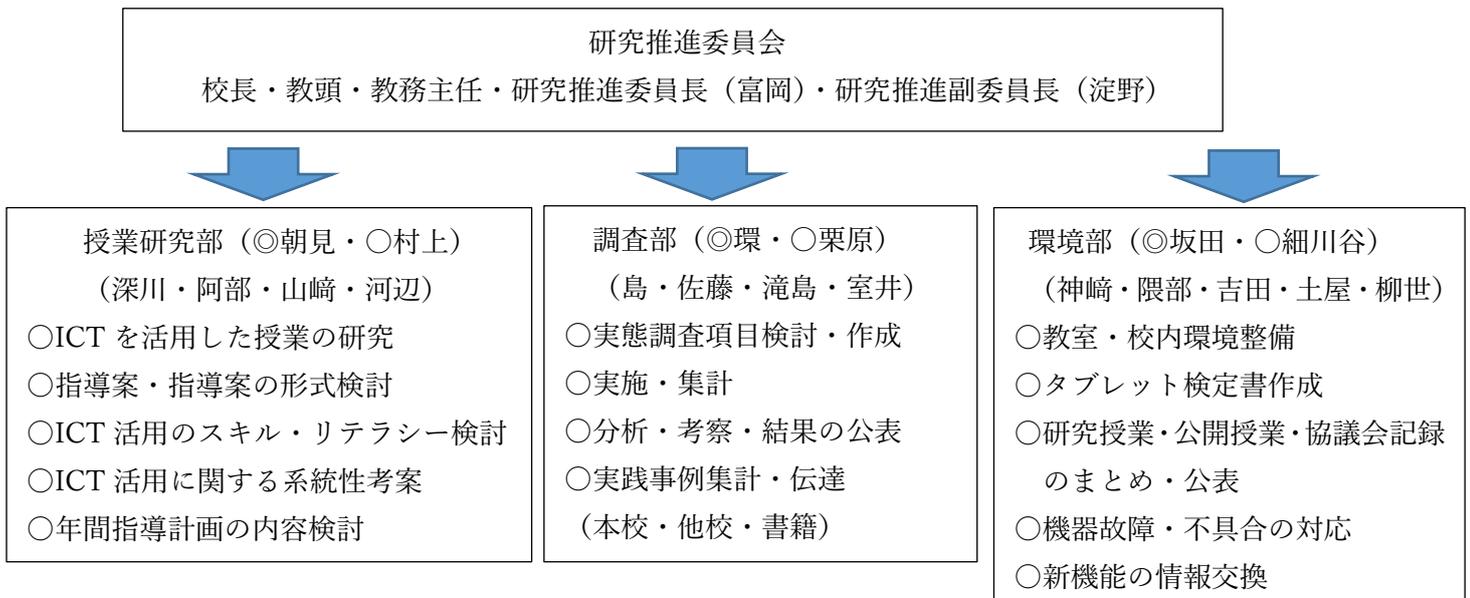
「主体的・対話的で深い学びの創造 ～ICTを活用した授業実践を通して～」という研究主題に基づき、

- ①学びの基盤となる基礎知識・技能の習得（タブレットの基礎技能、qubenaを用いた漢字・計算の復習）
- ②思考力・判断力・表現力を伸ばす、積極的な協働学習
（アクティブ・ラーニング、コミュニケーション、チームワーク、プレゼンテーション）
- ③学びの自己更新を図る児童自身による自律的な評価活動
（アクティブ・ラーニングに係る自己評価シート、ルーブリック評価）

という3つのことを意識し、ICTを効果的に活用しながら組織的、計画的に行っていくことで、

【資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続ける子】を育てることができるのではないだろうか。

研究組織



※◎は→部長 ○は→副部長

2 研究の内容

(1) AL（アクティブ・ラーニング）の導入

★**AL**⇒学びの質と量を深め、児童の資質・能力を育むこと。今までの課題解決的な学習を、どの教科でも「より丁寧に実施」していく授業形態。課題解決的な授業の流れで質と量を積み上げる。

★教科による AL 実践の特性

「課題の発見・解決」を目指す授業には、教科の特性がある！

- ・「課題解決…算数・理科・社会」
- ・「創作表現…国語・音楽・図工・家庭科」
- ・「問題解決…体育・道徳」

① AL による教育効果

→「学力の向上」「21 世紀型スキルの育成」「集中力や学習意欲の向上」「達成感、自尊感情、自己肯定感の向上」「認め合いのできる学級経営」「生徒指導上の課題解決」「入試対策への対応」「社会参画の意識向上」「個別最適な学びの実現」

② 3つの AL 学習レベルと学習プロセス

ア 習得学習の段階

- ・教師が中心となって AL を仕掛ける段階。一斉指導の中で、問題解決的な学習を仕組み、学習の見通しやゴールを伝え、「児童の自力解決の時間」、「協働的な学びの時間」を計画的に取り入れ、アクティブに児童を動かしていくレベル。

・プロセス

⇒学習課題の提示⇒解決の見通し⇒自力解決⇒協働解決⇒一斉検証

⇒まとめと振り返り

イ 活用学習の段階

- ・教師よりも児童が主体となってALが成立する段階。学習の見通しやゴール、評価について教師と児童が共に考え、問題解決的な学習を一緒に仕組んでいく。活動を児童に多く委ねていくレベル。
- ・プロセス
→学習課題の提示→既有知識・技能の想起→解決・創作・実践→発表と検証・考察
→まとめと評価

ウ 探究学習の段階

- ・児童自らが単元のゴールを見据え、見通し、評価について考え、探求していく段階
- ・プロセス
→調査→計画→実施→評価→改善

③ AL を成立させる学習要素

ア 学習スキル（学び方のスキル）…教科共通で必要となる技能

- ・「基礎スキル～問題解決スキル」を、低学年～高学年まで系統的に整備する。

イ 学習モデル…補助論、手本

- ・対話する（**話型**）・文章を書く（**文型**）・考える（**思考型**）手順を示すことで、言語活動や思考活動が促進される。
- ・低位の児童にも配慮した、**ユニバーサルデザイン**としても位置付けられる。

ウ ICTツール…学びの道具

- ・即時性、同時編集、共有等の効果的な使用
- ・思考の可視化
- ・思考ツールの活用

エ 学習チーム…協働する組織の構築

- ・小集団による協働解決・共同制作の場面、異なる考えを比較し発表し合う場面、学習ルールを作り、守り合う場面の設定を図る中で学級力を向上させる。⇒「**学級力アンケート**」での検証

オ 学習ルール…授業規律

- ・1年生～6年生までの系統的な学習ルールの確認
- ・可視化して、いつでも確認（**新聞っ子のルール**）
- ・「**新聞っ子のルール**」の掲示…ルールを守る意味を丁寧に児童と共有し、ちくちく言葉の無い心地よい注意をし合える関係・雰囲気作り

④ 多様な視点から学習のアクティブ化を図る

→「課題設定」「思考」「メタ認知」「対話」「資料活用」「考察」「表現」「評価」など

⑤ 様々な視点からトータルで授業を見直す（授業がシステムとして成り立っているか）

→学習目標・学習課題・学習内容・学習形態・学習方法・活動系列・メディア活用・教材リソース・学習環境・評価方法（ループリック評価、自己評価と相互評価）（別紙⑦）

⑥ 教師の授業評価チェックシートの活用

→ALの授業が成立しているか、成立させるための条件を備えた授業になっているのか確認

(2) 授業改善の工夫と視点

【授業づくり3つの工夫】

- ①児童が必要感をもてる導入（前時・共通単元の振り返りなどを含みながら、「問い」をもたせる）
- ②児童がアウトプットし、学び合う場や時間の確保
- ③児童が授業を振り返り、自己更新を図る場や時間の確保

ICTのメリット（即時性・可視化・情報の共有化・蓄積など）を活用して、次の3つの視点を基にICTを意図的に活用していく。

【ICT活用3つの視点】

- ①なぜ「その場面」でICTを活用しようとしたのか。
- ②なぜ「その機能」を選んだのか。
- ③子供にどのような「よりよい学び」を促すことができたのか。

【振り返りの8つの視点】

- ①わかったこと、できるようになったことは何か？ ⇒ 「知識・技能の習得」
- ②わからなかったこと、できなかったこと ⇒ 「知識・技能の習得」
- ③友達の考えを聞いて思ったこと ⇒ 「対話的な学び」
- ④自分の考えが変わったこと ⇒ 「対話的な学び」
- ⑤自分にとって役に立ったこと ⇒ 「実社会とのつながり」
- ⑥生活にいかしたいこと ⇒ 「実社会とのつながり」
- ⑦疑問に思ったこと ⇒ 「深い学び」
- ⑧もっと知りたいこと ⇒ 「深い学び」



「主体的・対話的で深い学び」を意識し、社会に開かれた教育課程につながる振り返り

以上の授業改善の工夫と視点をALの実践の中で積み重ね、日々授業改善を行う。

(3) 評価方法（ルーブリック評価、自己評価と相互評価）

① 「書くこと」に焦点化する経緯

国語科の研究を進めるにあたり、令和3年度埼玉県学力・学習状況調査の結果から、本校の児童の実態として記述式に関する平均正答率のマイナスポイントが顕著であり、また、言葉の特徴や使い方にも課題が見られた。そのため、問題の意図を正確に読み取り（題材設定の把握）、自己の考えをもち（考えの形成）、それを端的に記述し（構成の検討）、解答の確認（推敲）する力を高める必要があると考えた。

② ルーブリック評価を取り入れる経緯

ALによるグループ活動や課題の発見・解決を取り組む学習形態を実施する際に、テストによる点数化だけでは評価できない児童の思考や表現、言語活動等の到達達成度を把握しやすくすることで、児童の学びに向かう姿勢や協同的に課題の発見・解決を進めることを期待できる。そのため、教師側の指導と評価の一体化の定着、児童側の目的意識をもった学習活動につながり、本校の児童の学力向上につなげることができると考えた。

③ ルーブリック評価作成の視点

「国語科、もしくはALに精通している先生でないと作りにくい・使いにくい」ではなく、「すべての先生が教科や項目を問わずに作って使える」ように、基本的な型を考えた。

④ 本校におけるルーブリック評価の変遷

全職員で取り組むにあたり、段階的にルーブリック評価の在り方を模索してきた。以下にその取組を紹介する。

ア 第5学年 国語科「なまえつけてよ」 指導者 富岡教諭

感想を伝えある活動 ルーブリック評価

評価観点	1 知識・技能 (作品の感想)	2 思考・判断・表現 (登場人物の 相互関係や心情)	3 思考・判断・表現 (人物像、表現の効果)	4 態度 (学びに向かう人間性)
評価規準	語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、思考に関わる語彙を豊かにし、話や文章の中で使っている。	「読むこと」において、登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えている。	「読むこと」において、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。	描写を基に、進んで登場人物の相互関係を捉え、学習課題に沿って、感想を伝え合っている。
レベル3	物語の中から言葉や文章を3つ以上引用し、根拠をしめしながら感想を伝えることができる。	人物相関図を自力で作成し、登場人物の関係を理解しながら、描写に基づいて心情を捉えている。	主題に迫るため、叙述や描写に基づいて、人物像を想像したり、表現の効果を捉え説明したりしている。	題名や叙述、描写から二人の関係の変化をまとめ感想を伝え合ったり、二人の今後について想像したりしている。
レベル2	物語の中から言葉や文章を1つ以上引用し、根拠をしめしながら感想を伝えることができる。	人物相関図を教師と一緒に作成し、登場人物の関係を想像しながら、描写意識して、心情を捉えようとしている。	主題に迫るため、叙述や描写に基づいて、人物像を想像したり、表現の効果を捉え説明したりしている。	題名や叙述、描写から二人の関係の変化をまとめ感想を伝え合ったり、二人の今後について想像したりしている。
レベル1	何となくの感想のみで、根拠を持って自分の感想を伝えることが出来ない。	自力で人物相関図を作成することが出来ず、描写も捉えることが出来ない。	叙述や描写を読み取れず、自分像を想像したり、表現の効果を確かめたりすることが出来ない。	学習課題から外れ、感想をまとめることが出来ず、発表も出来ない。

本単元では、物語文の登場人物の心情を理解するために必要な項目を焦点化し、各指導項目に準じてルーブリック評価を作成して取り扱った。

自分の「聞く」力を高めるために、評価表を作成しよう！

ポイント	1、メモの取り方	2、表情などの読み取り方	3、聞く態度や相づち	4、要点をまとめて書き表せる
単元目標	伝えようとしている内容を聞きもらさず、短い文や箇条書き、見出しをたてたり、記号などをつけて図式化したりしてメモを取ることができる。	話している人の声の高さや表情から思いを想像し、言葉以外に表したいことを読み取ることができる。	話している人と気持ちよくやりとりができるために、視線や相づち、表情に気をつけて話を聞いてメモを取ることができる。	聞き取りメモをもとに、話ししてくれた人の思いを他の人に正確に伝えることのために文章に表すことができる。
レベル3 目標達成 するため	相手と読み比べて、いい点、悪い点を言い合えるようになりたい	話をよく聞き話に入っているような感じでさらに表情にも注目したい	集中さらに姿勢を良くしたい	相手に分かりやすい
レベル2 今の自分	図・矢印を付け加えて、見出しを忘れずメモを取りたい	話をしている時の雰囲気しかわからないから上のようにになりたい	人が話をしていたら相づちする	自分が知らなかったらまず自分にわかるように書く。
レベル1	メモは取っているが、伝えようとしている大切なことをつかむことができない。	言葉だけに着目してしまい、話している人の思いまでは読み取ることができない。	メモを取ることに精一杯で、話している人のことを考えた聞き取り方ができない。	聞き取りメモから、話ししてくれた人の思いを他の人に伝える文章が書けない。

本単元では、単元目標と現在の自己の力を比較し、児童自らが評価段階を設定したルーブリック評価を作成して取り扱った。

ウ 夏季校内研修

上記2つの提案授業から、ルーブリック評価を児童の実態や単元内容に合わせて作成することの困難さを感じ、「日常的に使用」できて、「誰でも作成できる」ことを目的に、指導要領より内容を抜粋して作成する研修を実施した。

評価	題材設定、内容検討、情報の収集	構成の検討	考えの形成・記述	推敲	言葉の特徴や使い方
3					
2					
1	A	B	C	D	E
備考					

※基本として、指導要領の文言をそれぞれの評価段階の3（最高位）に設定し、評価段階の3からキーワードを抜いていく形式で評価段階の2、1を作成する。



本研修を基に、全職員がルーブリック評価を作成して公開授業を実施した。（別項参照）

【国語】C 読むこと<文学的な文章>ループリック評価

	つきたい力			
学習過程 ※1	とらえよう (構造と内容の把握)	ふかめよう (精査・解釈)	まとめよう (考えの形成)	ひろげよう (共有)
評価規準 ※2	「読むこと」において、登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えている。	「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。	「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。	「読むこと」において、文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。
レベル3 ※3	登場人物の行動や気持ちなど、叙述を基に捉えている。	登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。	文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつことができる。	文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付いている。
レベル2 ※4	場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えている。	場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像している。	文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもっている。	文章を読んで感じたことや分かったことを共有している。
レベル1 ※5	場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えることができない。	場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができない。	文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想をもつことができない。	文章を読んで感じたことや分かったことを共有することができない。

指導要領の項目を活用し、レベル（指導事項通りをレベル3、1・2年生の指導事項をレベル2、レベル2の否定型をレベル1）を設定したループリック評価を作成して取り扱った。

【単元の評価】

	読むこと 「馬のおもちゃの作り方」 「けん玉の作り方」	書くこと 「おもちゃの作り方をせつめいしよう」
	事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。	事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。
レベル1	「馬のおもちゃの作り方」から、複数の「説明の工夫」に気を付けて読めた。 ①文章のまとまりの工夫 ＜はじめ＞＜材料と道具＞＜作り方＞ ＜楽しみ方＞ ②＜作り方＞の順序と順序表す言葉の工夫 「まず」「つぎに」「それから」 ③長さや量を数字にする工夫 ④図や写真を効果的に使う工夫 ⑥短い文にする工夫	学習した「説明の工夫」を使い、1年生にもわかりやすい「おもちゃの作り方」を書くことができた。 ①文章のまとまりの工夫 ＜はじめ＞＜材料と道具＞＜作り方＞ ＜楽しみ方＞ ②＜作り方＞の順序と順序表す言葉の工夫 「まず」「つぎに」「それから」 ③長さや量を数字にする工夫 ④図や写真を効果的に使う工夫 ⑥短い文にする工夫
レベル2	レベル1と児童自身の差を埋める内容を、児童自ら考える欄	レベル1と児童自身の差を埋める内容を、児童自ら考える欄
レベル3	「馬のおもちゃの作り方」から、文章のまとまりに気を付けて読めた。	文章のまとまりに気を付けて、「おもちゃの作り方」を書くことができた。

【本時の評価】

	書くこと
	<作り方>の説明の順序を考えること。
レベル1	<作り方>の順序にそって、自分のカードを並び替え、まとめることができた。
レベル2	<作り方>の順序にそって、自分のカードを並び替えることができた。
レベル3	<作り方>に必要な作業を考え、カードに書くことができた。

本単元では、単元の評価規準と本時の評価基準を分けたルーブリック評価表を作成し、児童に分かりやすい自己評価を提示して取り扱った。

カ 第5学年 国語科「想像力のスイッチを入れよう」 指導者 山崎教諭

	第2時	第3、4時	第5、7時	第6時(本時)
	①文の中で語句の係り方や語順、文と文との接続の関係、話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解すること。 (知識)	②事実と感想、意見などとの関係を <u>叙述</u> を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。 (思考)	③文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。 (思考)	④文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること (思考)
レベル3	3つのまとまりと、その根拠を2つ以上見つけることができた。	事例と筆者の意見の内容と事例を挙げる効果を本文から押さえ、文章全体の構成を捉えて、筆者の主張と事例とのつながりについて読み取ることができた。	持っている知識や理解した内容と筆者の考えを結びつけて、自分の考えを書くことができた。	友達の考えとの共通点や相違点に着目し、それらを取り入れながら、複数の視点で自分の考えを広げることができた。
レベル2	3つのまとまりと、その根拠を1つ見つけることができた。	事例と筆者の意見の内容を本文から押さえ、文章全体の構成を捉えて、筆者の主張を読み取ることができた。	筆者の考えを用いて、自分の考えを書くことができた。	友達の考えとの共通点や相違点に着目し、自分の考えを広げることができた。
レベル1	3つのまとまりがわかった。	事例と筆者の意見が書かれた部分を本文から押さえ、初め・中・終わりの構成と、筆者の主張が書かれた段落を見つけることができた。	自分の考えを書くことができた。	友達の考えとの共通点や相違点に気付くことができた。

本単元では、単元の評価基準と第何時に取り扱うのかを明示し、児童に見通しをもたせて学習を進めることができるルーブリック評価を作成して取り扱った。

R4ルーブリック評価に関する振り返り

児童の声

低学年

- 自分がクリアするためのポイントが分かりやすくよかった。
- 文章だったら、なんの項目を入れなくてはならないのかが分かってよかった。
- 自分の進む道が分かりやすい。
- △出来ていないときに、プレッシャーになる。
- △クリア出来ないときに、どうしたらクリアできるようになるのかが分からなくて、悩んでしまった。

中学年

- これができればA評価になる、できなければB評価になるなど、やるべき事ははっきりするのでやる気がする。
- ルーブリック表にはレベルがあるので、早く達成しよう、と自分から理解を深める行動をする事が出来て、とても授業がスムーズに進みました。
- △自分の今の位置が、自分が目指したい目標とかけ離れていると「そんなにがんばれない」と思ってしまう。
 - ・他にルーブリック表に書いてある事が出来たらこれが出来る様になる、という例を入れたら、次はこんな活動をやるんだな、と考える事が出来て、より授業に対する理解度が高まると思います。

高学年

- 自分が今回どこまで行ったか次はどのレベルを目指そうかなど一目見ただけで今自分がどこにいるかがわかる。
- 目標を立てて取り組める。
- 目指すべき目標がわかり、やる気に繋がっていいと思います
- 良かったと思います。①どこを目標にしたらいいいのかがあまりわからなくなるときがあるから②自分の評価がわかるから。
- △あってもなくても変わらないので自分的にはつくる（ルーブリック評価）時間が無駄だと思う。

教師の声

低学年

- 子供たち自身が、どのように学びを進めていくのかの道筋になっていたと感じる。それを意識して学習を進められている児童もいた。
- 振り返りの視点となっていて、よかった。
- よく出来る子ほど、目標をしっかりとしてとらえて学習を進めていた。
- △個人で作成するのではなく、学年や学校で取り組んでいくと共通理解のもと学習過程を組み立てられると感じる。
- △そもそも自己評価だけでは成り立ちにくい気がする。(下の学年になればなるほど)

中学年

- 学習の到達目標が明確で、見通しをもって学習に取り組める
- △教師の言葉、児童の言葉2通り用意する手間がある。
- △作成に多くの時間を要するので、どの教科でも、毎単元作成できるものではないと感じた。
- △児童の自己評価が適当でいいかげんであることがあった。児童の自己評価と、他者や教師の評価を突合し、自己評価と他者評価(教師の評価を含む)の整合性を図る必要があると感じた。そうでないと、いいかげんな自己評価で終わってしまう。
- △3年生だからとも言えるが、そもそも自分の成果物を客観的に評価するのは難しい。いくら児童用のルーブリックを開示しても、自分の到達度がどこに位置しているのかを児童自身が評価するのは難しい。
 - ・作成が大変。校内研究用として用いていくのはいいと思うが、普段からこれを毎時間行うのは現実的に不可能。この研究主題が終了したあとに果たしてどのような形で新開小に残していくのかを考えていく必要があると感じた(いわゆる出口戦略の策定)。3年間だけやって終わりではもったいないです。また、作成が大変なことから、研究して磨いてきたものを日々の授業に還元できない(毎時間行うのは難しいため)のも、もったいない気がします。
 - ・単元を通して何を学習するのか意識をもち、観点を意識して取り組んでいた。その結果、身に付けさせたい力を高める事ができた。ただ、文言が難しく児童への説明を要したので、分かりやすい表記に変える必要がある。

高学年

- 児童の反応から、「どんなことができればいいのか」というゴールが明確になっていることが、学習への意欲や達成感を感じさせることに繋がっているのだと分かった。
 - ・実施については、教材研究に加えてルーブリック評価の作成となると、全単元での実施を考えると多くの時間を要すると感じる。学校や学年内においてデータの共有をはかり、次年度以降にも引き継げる仕組みの構築があると負担軽減並びにルーブリック評価への取っかかりが楽になると思う。
 - ・児童の意欲は格段に上がったと感じる。また、評価する際も、迷わずに評価することができるので、教師にとってもいいと思った。ただ、自己評価する時に難しい文言もあるので、言葉や表現の工夫は必要だと感じた。

ひまわり

- ・客観視できないため、全て良い自己評価にしてしまう。そのため、その日の達成状況を教師が記録していかないといけないと感じた。

担外

- ルーブリックを始める前と比べて、評価規準が明確になり、可視化したことで、A+を目指して意欲的に取り組む児童が増えた。
- 本時のルーブリック(児童の自己評価)を児童と一緒に決めた時は、いっそう意欲が高まっていた。
- ルーブリックを使うと、1時間の内で中間評価、最終評価ができる。児童の伸びを見取ることができる。「主体的」の評価がしやすくなった。

第3学年2組 算数科 単元名「登場人物の変化に気を付けて読み、感想を書こう」
教材名「まいごのかぎ」 授業者 室井 薫平 教諭

単元の目標

- (1) 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語句を豊かにすることができる。
- (2) 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えることができる。
- (3) 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結びつけて具体的に想像することができる。
- (4) 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。

本時の目標（本時の学習 5/7時）

登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結びつけて具体的に想像することができる。

【思考力、判断力、表現力等】

室井教諭の指導観

指導の過程として、①作品全体を読む②作品の細部を読む③再度作品全体を読み、中心人物の変容を捉えるの3つを大まかに設定した。③では、中心人物の気持ちの変容と山場、そして山場の中で中心人物が最も大きく変わる部分（クライマックス）を明らかにし、作品全体を一文で書くことで、登場人物の変化を捉えるようにする。

また、ルーブリック評価を使って、現在の立ち位置を確認させる。

単元の最後には、文章を読んで理解したことに基づいて感想文を書き、友達と交流する。一人一人の感じ方に違いがあることに気づき、作品の面白さや読書に対する親しみをもてるようにしたい。

表に整理された、前時までの学習を掲示した。

ロイロの共有ノートを利用し、考えたことを話し合った。

話型を掲示することで、話し合いの流れをスムーズにした。



【研究協議における成果○と課題△】

- ① 児童が必要感を持てる導入であったか。
 - 画面共有で、全員が同じスタートラインに立てた。
 - 前時までの学習をしっかり押さえていたため、本時の学習に円滑に入れた。
 - △クライマックスが知りたいという必要感を持っていない。
 - △作品全体を一文でまとめるのであれば、その目的は何かを明らかにすると必要感につながる。
- ② 対話的な学習からの広がり、深い学びにつながっていたか。
 - 児童同士で進捗状況が把握しやすい。
 - △見せ合って終わり（会話がな）班もあり、自分の考えの根拠となる叙述から、なぜそう考えたのか理由をもっと言わせたかった。
 - △ロイロに自分の考えを打ち込むことに時間がかかり、充実した話し合いに繋がらなかった。
- ③ 児童が授業を振り返る場が工夫されていたか。
 - △振り返りの時間がなかった。
 - ルーブリック評価は明日の授業で行う。

研究授業者 3年2組 室井薫平 教諭 教科 国語「まいごのかぎ」

【研究協議会】

1 授業者反省

〈单元について〉

(1) 見方、考え方

- ・言葉の意味、使い方に着目して、場面と結びつけることを意識させた。

(2) 文章の捉え方

- ・読み方を教える。場面やクライマックス、中心人物などの用語を教える。反復的な指導を行い、汎用的な力を育成する。自分の考えを積極的にかけるようになってきた。

(3) 学ぶ必要感

- ・ループリック評価を使って、現在の立ち位置を確認させる。登場人物の変容を中心に読み、感想を書く。物語の構造をとらえさせる。

〈質疑応答〉

- ・導入の工夫→前時では、中心人物はわかったけど、出来事がとらえられなかった。これが必要感につながった。
- ・振り返りの仕方→出来事に沿った振り返りを予定していた。
- ・ループリック評価→明日の授業で行う。

2 協議 (A～D グループ)

A・・・○ロイロの学習に取り組もうとする意欲が高い。

△クライマックスを探そうという気持ちになっていない。

→大きく気持ちが変わるところは何か注目する。

B・・・○ほかの児童に意見を伝えられた。

△打つとき、聞くときの切り替えをする。どこまで話すのか言えるとよかった。

→打つ量を減らす。話し合いの体型を変える。山場を先に教える。

C・・・○前時までの変容を詳しくまとめるという流れができていて、本時の学習に円滑に入れていた。

△今日の中で振り返りがあるとよかった。

→評価する基準を載せる。簡単な振り返りを毎掲載せる。

D・・・○画面共有したことで全員が同じスタートラインに立てた。

△1文でまとめたことをどう生かすのか。感想を書くことを目的にした方がよいのではないか。

→1文でまとめるのであれば、その目的は何か明らかにすると必要感につながる。

单元を通してどこに共感したのかなどの感想を書いたほうがいろいろな考え方が出る。

3 指導講評 (安達一寿 先生)

- ・「アクティブ・ラーニング」とは、子供たちが学び取っていく授業。学び取ったことをアウトプットしていく授業である。

→アウトプットするものをどうつくるか？

〈研究授業について〉

- ・シンキングツール→考えを思い出す、創造する、作り出すことができると「個人の思考」の道具として機能していたといえる。道具を使うことが目的にならないように。
- ・共同的な学び→各自の考えをどう比較・検討するのか。短時間でまとめるのが難しい。それぞれの意見を集約・比較させる方法で、ICTを活用する。進度の差は、タイピングのスピードと文章を書く力。
- ・実態に応じて画面の配信をすると、メリハリがつく。
- ・ほかに有効なツール→テキストマイニング、スクールタクトのワードクラウドの機能
- ・見方・考え方の捉え方→子供たち自身で気づけるようになるために観点を明確にする。→深い学びにつながる。プロット図のカードの順番が変えられないとよかった。考え方がバラバラでよかったのか。
- ・ループリック評価→学習者の達成状況を評価する物。授業の達成目標と評価基準、評価規準のレベルを載せる。様々なループリックがある。(子供と共につくるものなど)
- ・評価基準の作り方→グループ化と見出し付け(最高の到達段階→最低段階→問の順)。程度を表す形容詞、副詞をうまく活用する。学校全体で教育基準を考えるのもあり。
- ・教育DX・・・教育業界に変革を求めること アナログからデジタルへ
→学校で集うことでしかできない教育をするのが学校。その他は学校でなくてもできるという考え方。先生の役割が変わってくる。いつでも学べる。前提にあるのがアクティブ・ラーニングである。

単元の目標

- (1) 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる。(知識及び技能)
- (2) 事柄の順序に沿って簡単な構成を考えることができる。(思考力・判断力・表現力等)
- (3) 事柄の順序に沿って粘り強く構成を考え、学習課題に沿っておもちゃの作り方を説明する文章を書こうとする。(思考力・判断力・表現力等)

本時の目標(本時の学習 9/14時)
 ○おもちゃの作り方を説明する文章の構成と順序を考えることができる。
 【思考・判断・表現】

深川教諭の指導観

本教材のおもちゃ作りという題材は、児童が意欲的、自主的に説明書を書いたり、読みあったりする活動に適している。また、書いたものを1年生に紹介することを目的とし、伝える相手を明確にすることで、より学習の必然性と必要性を高めることができる。

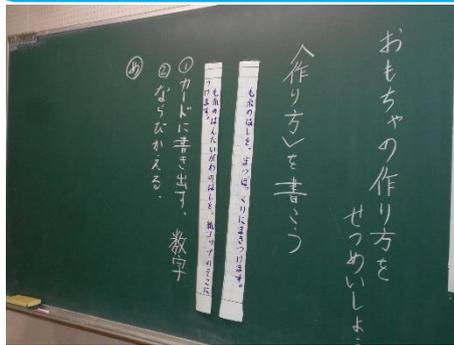
「〇〇の作り方」というようなものの作りの説明書には、二つの順序が大切になる。一つ目は、説明する事柄の順序である。ここでは「材料と道具」「作り方」「楽しみ方(遊び方)」の文章全体の組み立ての順序である。二つ目は、「作り方」の作業手順である。「まず」「つぎに」など順序を表す言葉と合わせて指導する。また文章に合わせて写真や図があるよさにも気づかせる。

説明書を書くにあたっては、見つけた説明の工夫から、自分の表現に必要なものを選択させる。自分が説明するならば、どんな説明の工夫を使えば相手に伝えられるのかを判断し、決定し、使用することになる。本単元では、作り方の順序がその中心となるため、「馬のおもちゃの作り方」(読むこと)の学習において、二つの順序については特に丁寧に確認をしていく。

1年生に伝えるというゴールを確認しながらのルーブリック評価の作成

説明の仕方を思いつくまきカードに書く
 →順序を表す言葉を考え、名説明文を組み立てる

一人で取り組むか友達と取り組むかを自分たちで考えての対話



【研究協議】

- ①一人一人が主体的に課題に取り組み始めるための導入の工夫(主体的に取り組む言語活動/必要感のある導入)
- ②友達と協力しながら課題解決に向かうようにするための工夫(ICTの活用と意図/児童のアウトプットによる学び合い)
- ③メタ認知を意識した声かけと自己の振り返りの工夫(ルーブリック評価、振り返り)
- ④以上の手立てを通じた授業の結果⇒よりよい学びになっていたか

以上の4つの点において授業参観及び研究協議を実施した。

〈まとめ〉

- ①について・・・単元を計画するにあたって、1年生のために書きたいという意欲を持たせられていた。本時順序が大事だということが前時までにはしっかり頭にはいていた。

低学年のルーブリック評価を一緒に作っていくのが難しい、A評価が分かっていないと、児童たちも分からないと思う。

- ②について・・・何を振り返るのか明確になればいいかも。次回にどのように生かせばいいのかが伸びにつながる。

- ③について・・・1年生に伝えるゴールを確認しながら、自分頑張らなきゃという意欲につながった。そのために今日ここやるという意識が出ていた。

- ④について・・・

必要感 1年生に伝えるゴールを確認しながら、自分頑張らなきゃという意欲につながった。そのために今日ここやるという意識が出ていた。

対話的 一人か友達と取り組みを自分たちで考えて活動していたので、必要な対話になっていた。

研究授業者 2年2組 深川亮介 教諭

教科 国語「馬のおもちゃの作り方」

【研究協議会】

1 授業者反省

(1) ルーブリック評価について

- ・どうやって子供たちと一緒に考えて、ルーブリック評価を入れて取り組んでいくか。ゴールは2年生が分かるように工夫を生かして自分で書く活動。順序をメインに考えて、作業順に書ければいい。毎時間のルーブリック評価がないと1時間のルーブリック評価が使いにくくなる。項目を1つに絞ってやっているが、一緒につくるのが難しい。

(2) アクティブラーニングについて

- ・1年生と遊んだ経験を生かしてどうやって書かせるか。
- ・順序を考えさせるのが大事だと学年で話し合った。接続語は後日やる予定だったが、工程だけ考えるのは子供たちにとって難しく考えすぎていて、活動の時間がかかった。
- ・児童たちは緊張気味で、普段は席を離れて自由に話し合いを行えている。
- ・時間がなく書けなかった所は、後日取り組む。本時は次の並び替えのところを見せたかった。
- ・一人で作業している児童がいた。順序を話し合う場面が主だったから、個別に取り組む時間を優先しなくてもよかったのかな。

2 質疑応答

- ・富岡…「毎時間、評価の仕方をどうやっていますか。」

→「6, 7回フォームで行っている。国語以外でも実施、フィードバックも行っている。」

3 協議 (A~D グループ)

A . . .

- ①必要感から単元を計画するにあたって、1年生のために書きたいという意欲をもたせられていた。
- ②本時順序が大事だということが、前時までにしかり頭に入っていた。
- ③低学年のルーブリック評価を一緒に作っていくのが難しい、A評価が分かっていないと、児童たちも分からないと思う。

B . . .

- ①材料が目の前であれば、短冊に記入しやすかったのかも。記録を見返す活動があってもよかった。
- ②メタ認知が難しい。やったことを文字化する活動は、低学年にとっては難しい。
- ③自分で解決方法を学んでいくことが大切。

C . . .

- ①メタ認知→何を振り返るのか明確になればいいかも。次回にどのように生かせばいいのか。伸びにつながる。

D . . .

- ①必要感からの出発は、1年生に伝えるゴールを確認しながら、自分頑張らなきゃという意欲につながっていた。そのために今日こやるという意識が出ていた。
- ②対話的→一人か友達か、取組みを自分たちで考えて活動していたので、必要な対話になっていた。

4 指導講評 (安達一寿 先生)

①今日の授業から主体的な学びの観点について

- ・「見通しをもつ・振り返る」ための ルーブリック評価をフォームで行う。
- ・評価規準→先生があらかじめ準備
- ・子供たちと一緒に作る…時間がかかる。2つ同時に行うのは難しいので、一つを先生が、もう一つを子供たちと考えるで行うのもよし。

②形成的評価・総括的評価によって作り方が変わるのでは。いずれの段階が可能か、有効か。課題ルーブリック的に考える方がよいか。振り返りに活用しながら、次につなげたい。

⇒その意味では、アンケート結果からスタートしてみるのもいい。

③対話的学び ICT の活用

〈作り方〉の構成要素を書きだす場面から順序まで

○個人カード

- ・なかなか文が書けない。⇒ヒントとなる動画・キーワードなどのスライドを準備
- ・構成要素に分解できない。⇒スライド枚数を決めることも
- ・必要な情報が整理できない。⇒順番の入れ替え、吟味も簡単 (この段階でも互いの様子を)

○グループ

- ・個人のカードがわからない⇒共有は簡単 (グループごとで要素のカードを作成することも)

第5学年2組 国語科 単元名「想像力のスイッチを入れよう」 授業者 山崎 憧羽 教諭

単元の目標

- (1)文の中で語句の関わり方や語順、文と文との接続の関係、文章の構成や展開、文章の種類とその特徴について理解することができる。
- (2)事実と感想、意見などの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる。
- (3)文章を読んで理解したことに基いて、自分の考えをまとめることができる。
- (4)文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げることができる。
- (5)積極的に意見や感想を共有して、自分の考えを広げ、学習の見通しをもって、情報との関わり方について話し合おうとしている。

本時の目標（本時の学習 6/7時）

- 文章を読んでまとめた意見や感想を友達と共有し、自分の考えを広げることができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕
- 積極的に意見や感想を共有して、自分の考えを広げ、学習の見通しをもって、情報との関わり方について話し合おうとしている。
〔学びに向かう力・人間性等〕

山崎教諭の指導観

単元を通じて児童の身近にある情報を題材に、情報に多面的・多角的な視点を持って向き合う経験を通して、情報との関わり方について考えさせたい。また、他者との情報の捉え方の違いを共有することで自分の考えを見つめ直し、自分の考えの変容を自覚させたい。

対話的な活動では、自分の考えをもち活動に参加できるようにする。ジグソー法を活用し、①1つの視点で話し合う段階、②それぞれのグループで話し合った内容を持ち寄り交流する段階に分けることで、話し合いの視点を明確にし、様々な意見に触れられるようにする。本単元では一貫して、ロイロノートを活用しながら考えを可視化させることで、友達の考えへの理解を深め、交流後の自分の考えの変容を実感できるようにする。そして、単元を通してルーブリック評価を行うことで、今の自分を振り返り、次時の課題を個々で持ち、学習へ取り組めるようにする。

情報を捉える4つの視点の確認と、本時のルーブリック評価の提示

ロイロノートによる思考の可視化とタブの切替を活用した考えの共有化

ルーブリック評価による本時の振り返りと前時までの自己との対話 →情報への関わり方への深まりを実感



【研究協議】

自分だったらどのように授業を設計するかという視点のもと、

- ①アクティブ・ラーニングを成立させるための手順を踏んだ単元計画であったか
- ②学びを促す活動であったか（ICTの活用や交流のさせ方）
- ③「めあて・学びを促す活動・ルーブリック・評価」の一体化が図れているか

以上の3つの点において授業参観及び研究協議を実施した。

〈まとめ〉

- ①について…記事を読むのが単元を通して複数回あったことで話し合いが活性化しなかった。
→言語活動をより活発にするには指導計画を練り直し、想像力のスイッチを働かせた見方をしっかり押さえてから、初見の記事を提示する等の手立ても考えられる。
- ②について…流れが大変スムーズだった。教師の指示を理解している児童が多く一生懸命活動していた。一方、教師主体の点が多く見られた。また、話し合いを活発化する手立てが少なく、“伝え合い”になってしまった点に課題が残った。
→①考えがあえて見えない通常ノートの活用②下線を引くだけにし、意見は口頭で伝達等、タブレット操作をしながら話を聞き、メモを取ることは難しい
- ③について…ルーブリック評価が簡略化されていて分かりやすかった。話し合いの仕方に関する説明もあり、指示も分かりやすく、児童が一時間の見通しをもって取り組んでいた。
→視点毎に話しやすさや判別の難しさに差があった。また、本時の課題である「考えの広がり」についてどう評価するのか、評価の根拠がどこになるのかを明確にする必要がある。

研究授業者 5年2組 山崎憧羽 教諭
教科 国語「想像力のスイッチを入れよう」

【研究協議会】

1 授業者反省

〈单元について〉

欠席者が多く、人数が揃わない中の授業であった。本当は、前半の話合いが多い人数、後半は少ない人数で行いたかった。実際は逆になった。教材文だけでなく、身近な読み物を使用した。本時は、教材文で学んだ視点を利用した、発展内容だった。プレ授業では、話合いによる思考の広がりが見られなかった。それは、そこまでの知識・技能の押さえが甘かったためだと考える。そのため、本学級では、知識・技能の授業により力を入れた。対話的活動にジグソー法を用いた。話合いの場面では、読んで終わりだけでなく、やりとりをしてほしかった。その為、会話のキャッチボールを行えるような指導を行った。更にルーブリック評価を用いることで、児童が意識して授業に取り組むことができた。

反省点は、時間管理がうまくいかず、振り返りの時間を確保できなかったこと。また、学習を深めるグループピングにも課題が残った。

2 協議

- ・振り返りにルーブリックを使う際は、その根拠も各自から出せると良いと思った。
- ・時間短縮のために、説明内容が多い場合は、掲示物を使用すると良い。
- ・考えを「拡げる」の意味を丁寧に説明していたのが良かった。
- ・話合いを活発にするための「共有ノート」で見ればわかるものばかりだった。それ以上聞くことがなかったのではないか。
- ・「考えを拡げている」をどのように評価するのか・・・振り返りに書いてあればいいのか？話合いの不活性の理由は何かを考えたとき、教材に慣れてしまっていた可能性がある。今日初見の文章を提示するものも有りだったと思う。
- ・流れはよかったが、教師主体になってしまっていた。

3 指導講評(安達一寿 先生)

- ・今日の授業は盛りだくさんな印象だった。
- ・アクティブ・ラーニング、ジグソー法←優れた方法である一方で、形だけを真似してもうまくいかない。学ぶ過程をきちんと意識して授業を行うことが大切。
- ・ICTレベルが高かった。これからのアクティブ・ラーニングは、子供たちが学び取っていく授業である。学び取ったことをアウトプットしていく授業実践を行い、児童自身が「私は〇〇ができるようになりました。」と説明できるようになることが望ましい。
- ・「主体的・対話的で深い学び」のモデル
主：見通しをもつ・粘り強く取り組む
対：多様な情報を集める・共に考えを練り上げる
- ・新開小のルーブリックは科目(单元)ルーブリック
→单元全体を俯瞰できる
→ゴールがあるから活動が明確化できる。最終的には育成したい能力として記述(到達度評価への紐付け)
※子供たちにとってわかりやすい言葉で書くことが大切。
→グループ活動の評価は難しい(子供達個人の評価になる)
C S C L (computer supported collaborative learning)
- ・ジグソー法は皆の考えを比較、変化、多様化するためにいい。ロイロを使うとよりうまく共有、発表、可視化できる。
- ・議論の力は議論の中で育てていかななくてはいけない。今日は、その力が備わっていたか？ジグソー法に適した、ロイロノートの設計は？(グループの対話)(今日は共有ノート①② リアルタイムのよさ/特徴は)など、様々な視点とまとめの方法(KJ法、思考ツールなど)を決めておく必要がある。

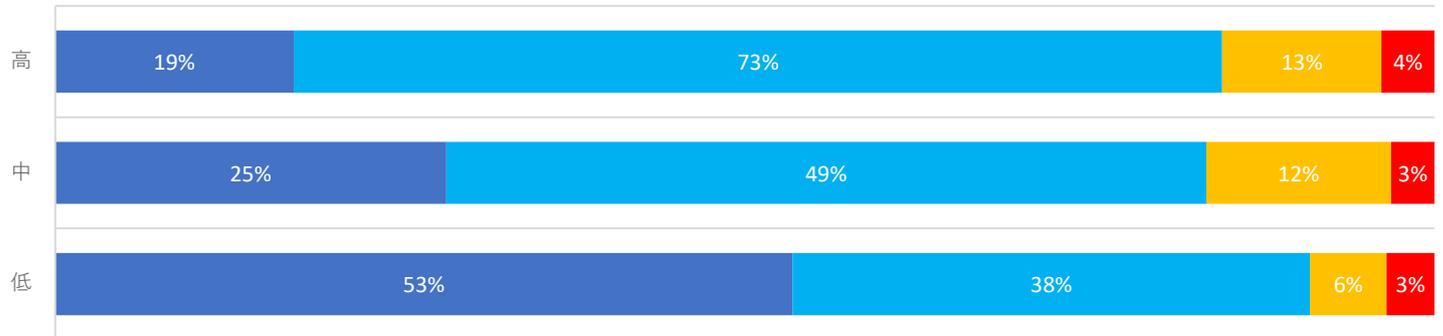
4 来年度に向けて

- ・アクティブ・ラーニング授業のモデル化⇒探究学習へのアプローチ(授業のモデル化)
- ・情報活用能力の育成から協働的で深い学びへ
- ・ICT活用の日常化→ステップアップ
(1 教員による教材の提示/2 個に応じた学習「未来シート」など)
- ・学校間交流もあり

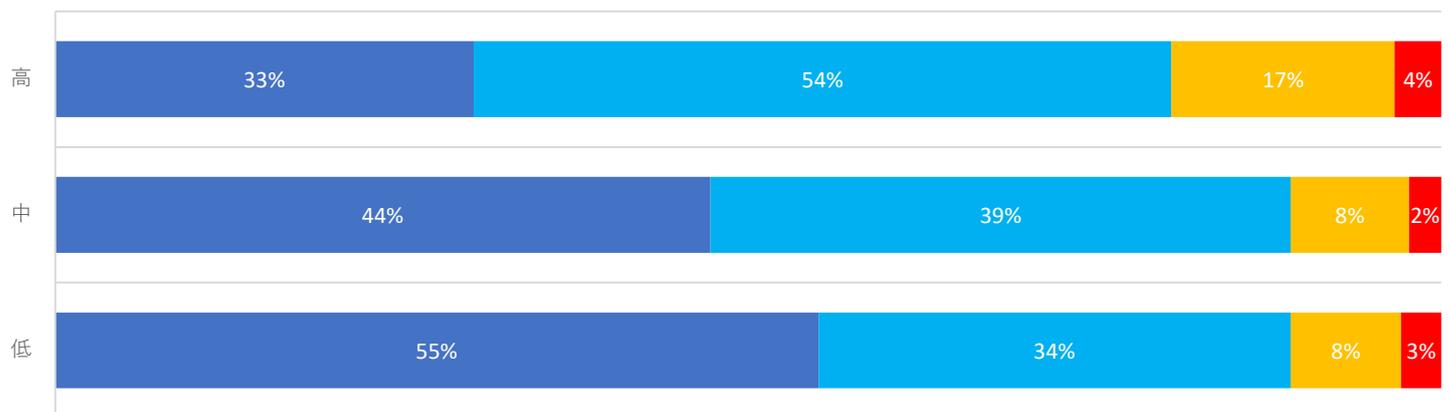
3 調査部

(1) ALアンケート 1学期

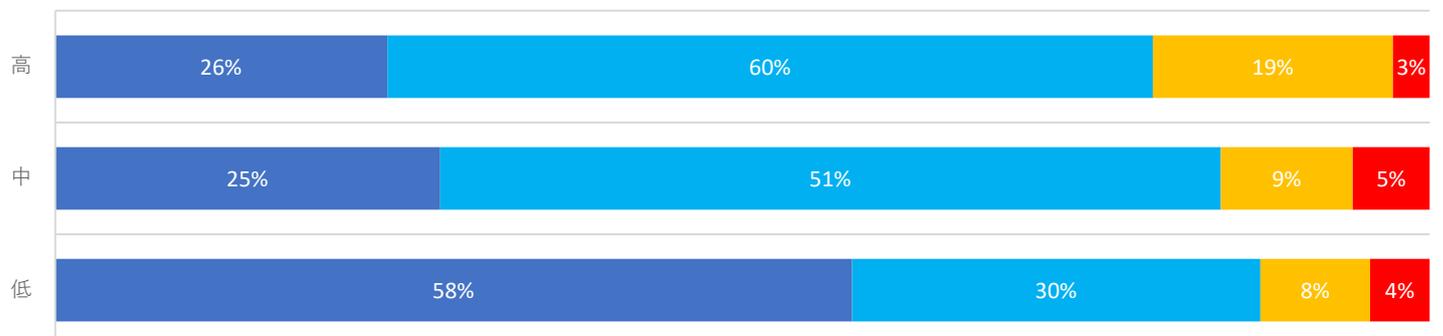
1-(1) 1時間の学習のめあてを意識して、学習の流れを考えて学習に取り組んでいる。



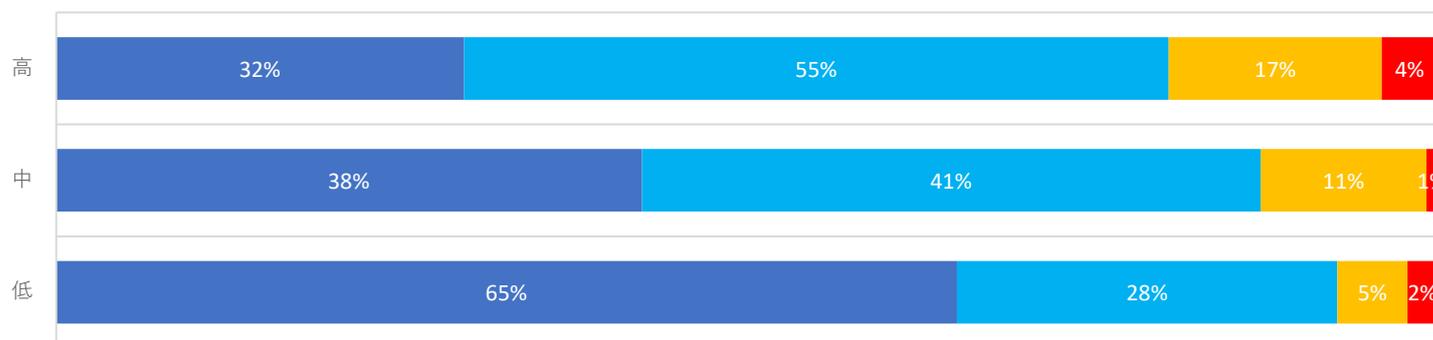
1-(2) 興味や関心をもって、学習に取り組んでいる。



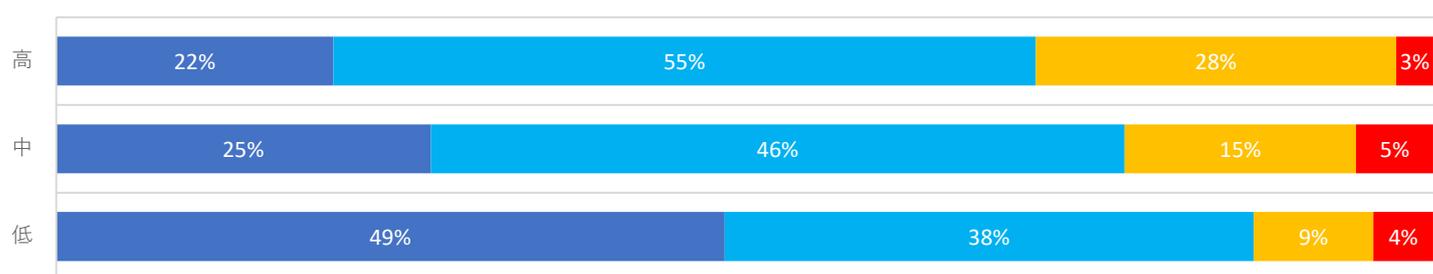
1-(3) 学習したことを、自分の生活と結び付けて考えている。



1-(4) むずかしいと感じた問題も、最後まで粘り強く取り組んでいる。



1-(5) 授業で新しく学んだことやもっと学習したいことを振り返りに書き、次の学習につなげようとしている。



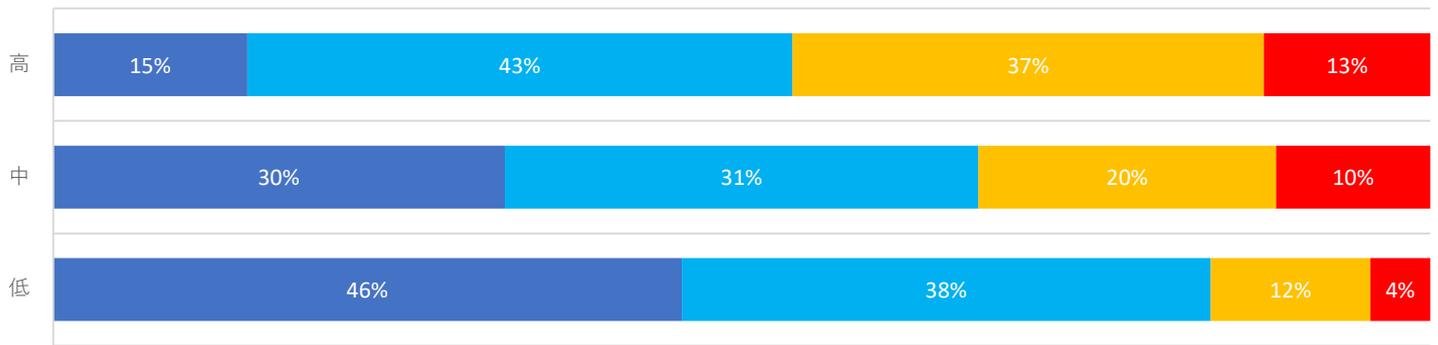
<主体的に取り組む態度>

1-(1)～1-(5) 考察

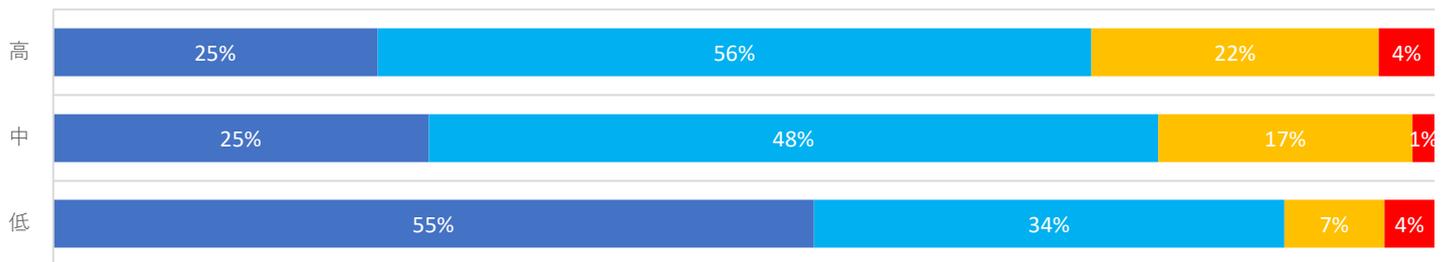
主体的に取り組む態度のアンケート項目は、高学年より低学年の方が、どの項目も肯定的な解答が多かった。めあてを意識し、興味をもって学習に取り組んでいるようだった。先生方が、授業の中でめあてを意識させた授業を行っている成果である。

この項目のアンケートの中で、数値が比較的低かったものは、1-(5)「新しく学んだことやもっと知りたいことを、振り返りに書き、次の学習につなげようとする」とであった。高学年の方が、肯定的解答が低くなっている。振り返りに書いて次時につなげているのかという質問なので、振り返りの書き方について再度指導する、振り返りの項目を教師側で設定するなどの工夫をすると、次時の学習のめあてになったり、次時の学習の予測をつけたりすることができるのではないかと考える。

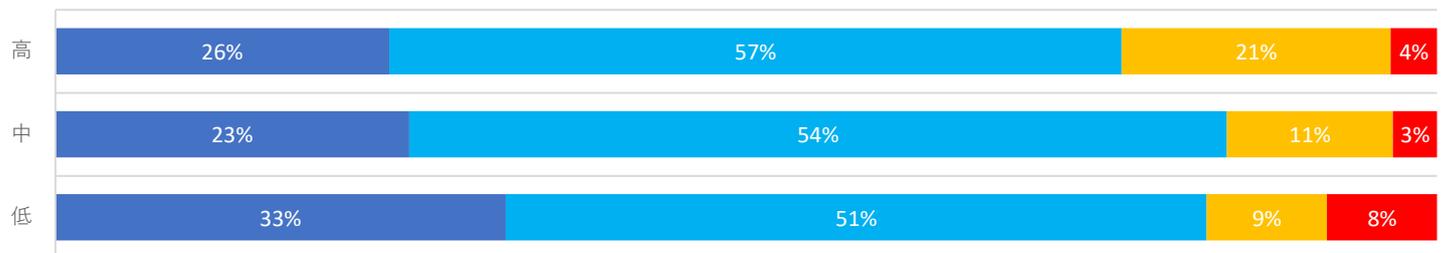
2 - (1) 私は、自分の考えをみんなの前で発表している。



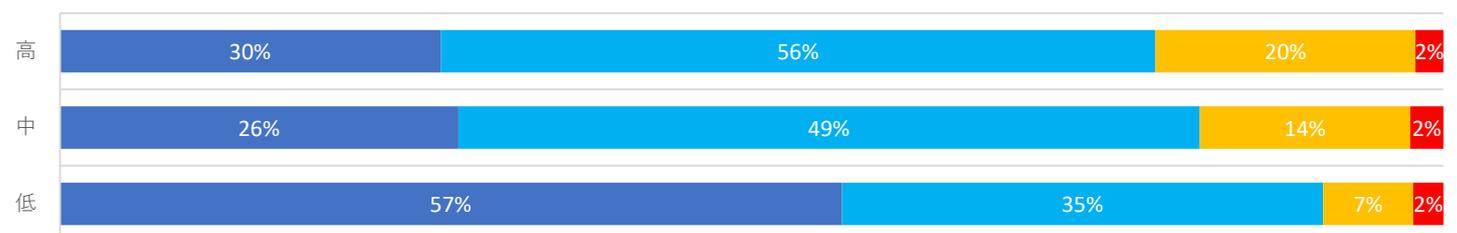
2 - (2) 友達の考えと自分の考えをくらべながら、学習を進めている。



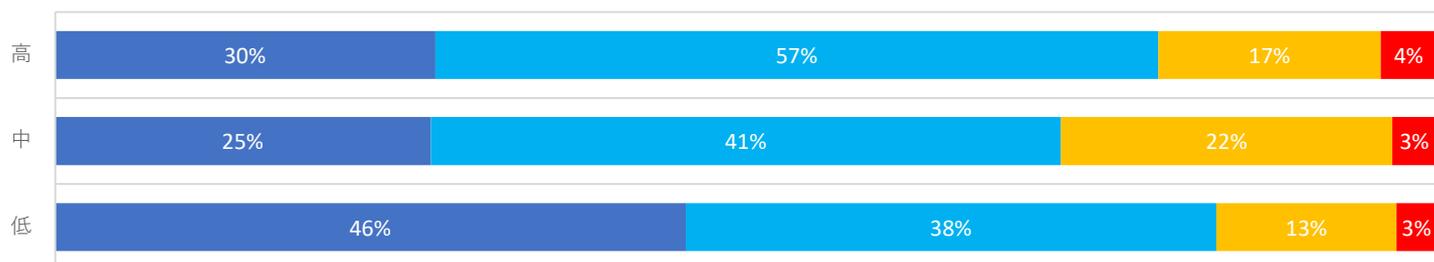
2 - (3) 友達に考えを伝えるとき、必要な方法（言葉や絵、式、身体表現、音など）を選び、相手に伝えるようにしている。



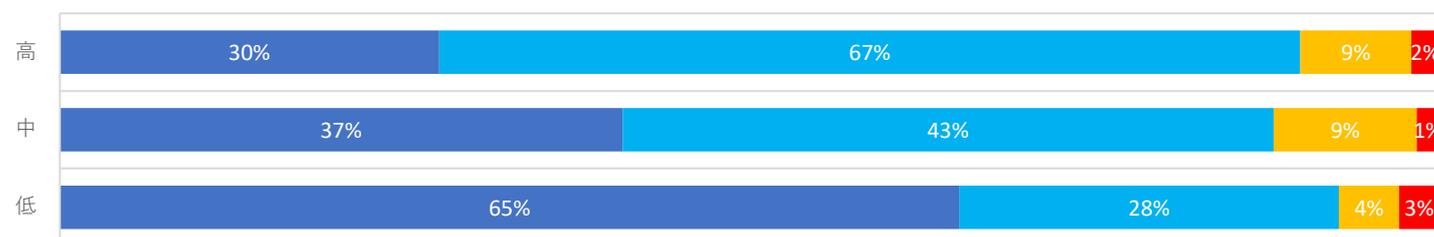
2 - (4) ノートやICTを活用して友達と交流し、理解したことや考えたことを分かりやすく整理している。



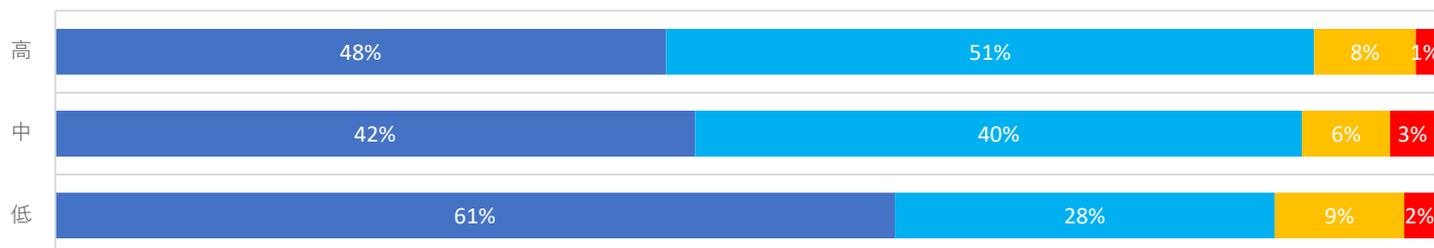
2 - (5) 対話や資料から多様な情報を集めて、学習している。



2 - (6) 問題や課題を解決するとき、先生や友達と一緒に考えて学習を進めている。



2 - (7) よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている。



<対話的な学習>

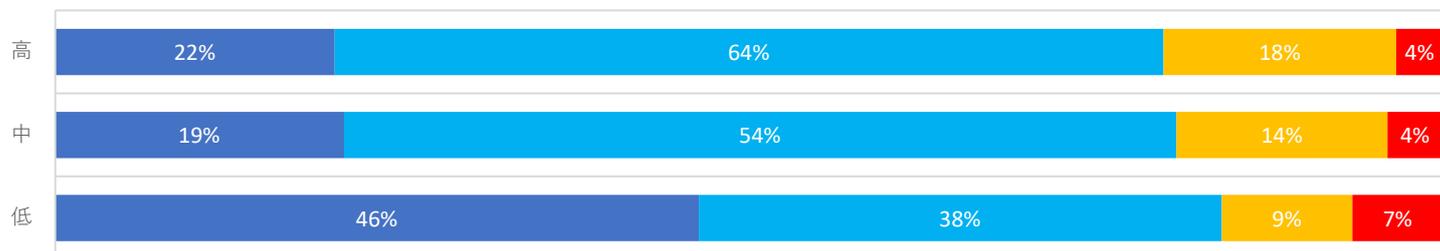
2 - (1) ~ 2 - (7) 考察

2 - (1) 「自分の考えをみんなの前で発表している」のアンケート項目が高学年が顕著ではあるが、**圧倒的に否定的解答が多かった**。その反面、よりよい考えのためには、**友達との交流が必要であると考えている児童が多い**。自分から考えを発表する児童の育成を図っていきたい。発表の方法についても検討する余地がある。従来の挙手、指名、発表という形にこだわらず、**児童一人一人が自分の考えを発表できる場の設定をしていく必要がある**。

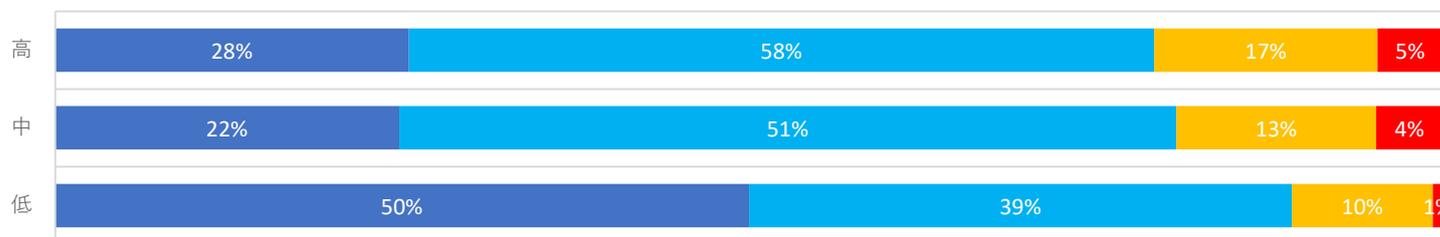
発表に紐付いたアンケート項目を見ると**2 - (2) 友達のと比較していくことに苦手意識をもっている児童が高学年に一定数見られるので、自分と他者との考えの比較検討ができるような、授業の進め方を仕組んでいく必要がある**。

友達との対話や資料から情報を収集したり、整理したりすることは、うまくいかないと回答している児童が少数ではあるが存在している。一人一人が取り組んだものを教師が見取り、個別での対応をしていく必要がある。

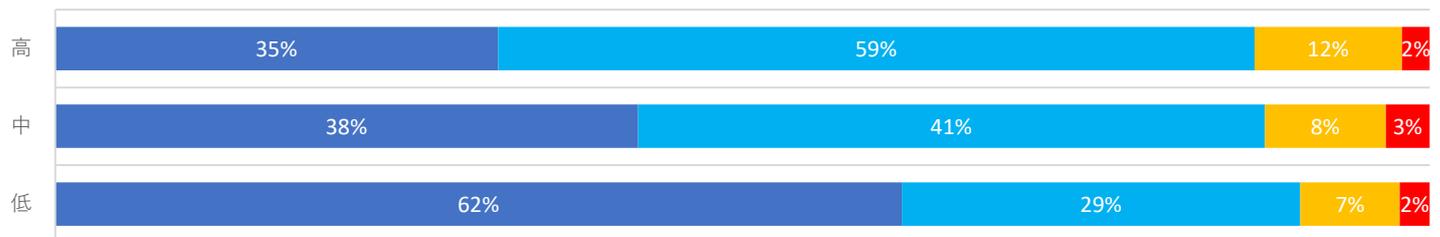
3 - (1) 読み取ったことや調べて分かったことを、自分の考えと結び付けている。



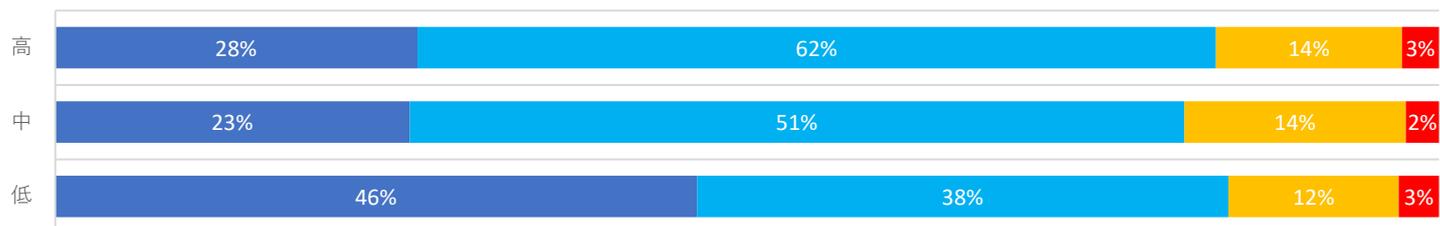
3 - (2) 前に学習したことと、新たに学習したことを関連付けて考えている。



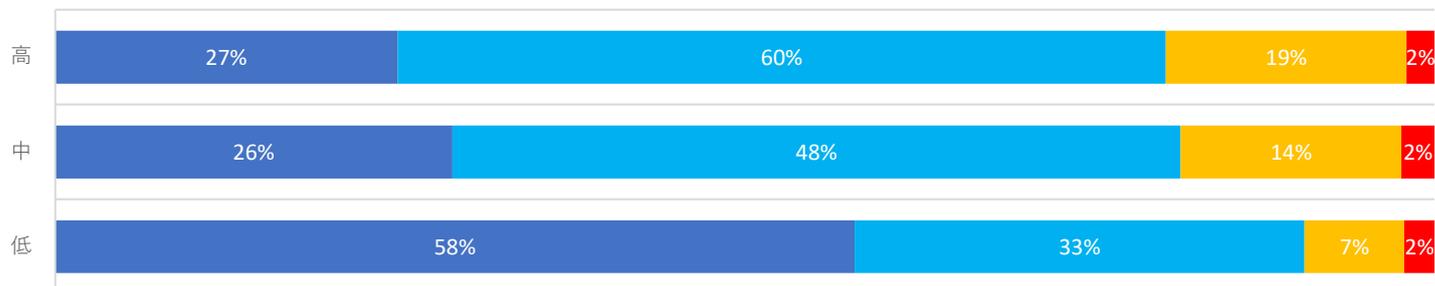
3 - (3) 授業を通して自分ができるようになったことを理解している。



3 - (4) 必要な情報を取り入れて、自分の考えを創り上げている。



3 - (5) 単元の中で、新たな課題を見つけ、解決しながら学習を進めている。



<深い学び>

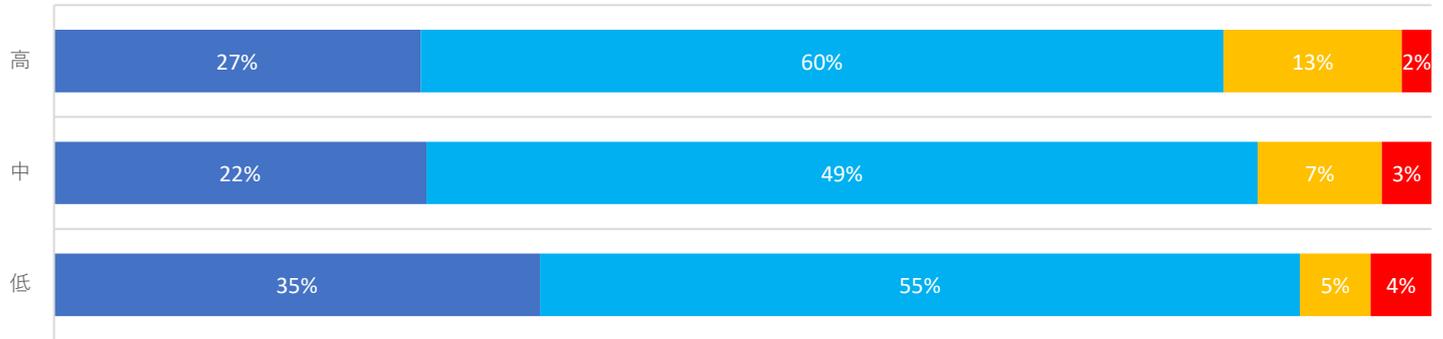
3 - (1) ~ 3 - (5) 考察

深い学びに関するアンケート項目は、内容が難しかったこともあり、どのアンケートも7割くらいが肯定的回答だった。3 - (2) と 1 - (5) が、同様のアンケート項目になっているが、同じような結果であった。学習したことや、新しく得た知識をどのように自分自身に返していくのかが、ポイントになってくる。教師自身も、既習事項や今後の学習への系統性を考え、児童に伝えていくことも大切であるので、他学年の年間計画を確認していけるとよいのではないかと考える。

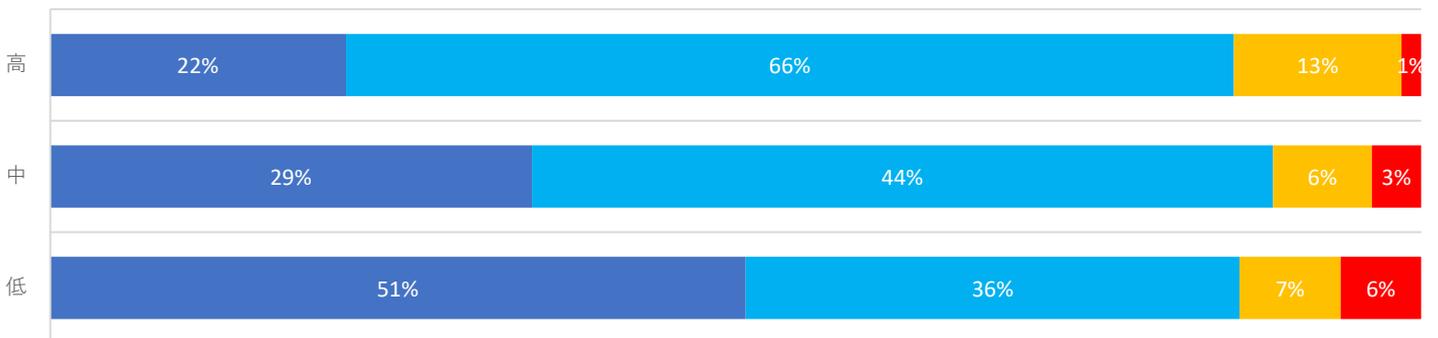
3 調査部

(2) ALアンケート 3学期

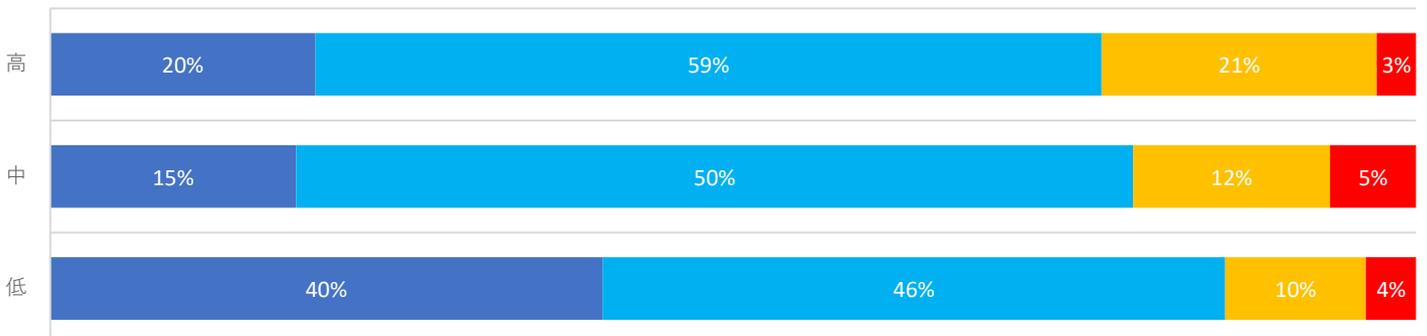
1-(1) 1時間の学習のめあてを意識して、
学習の流れを考えて学習に取り組んでいる。



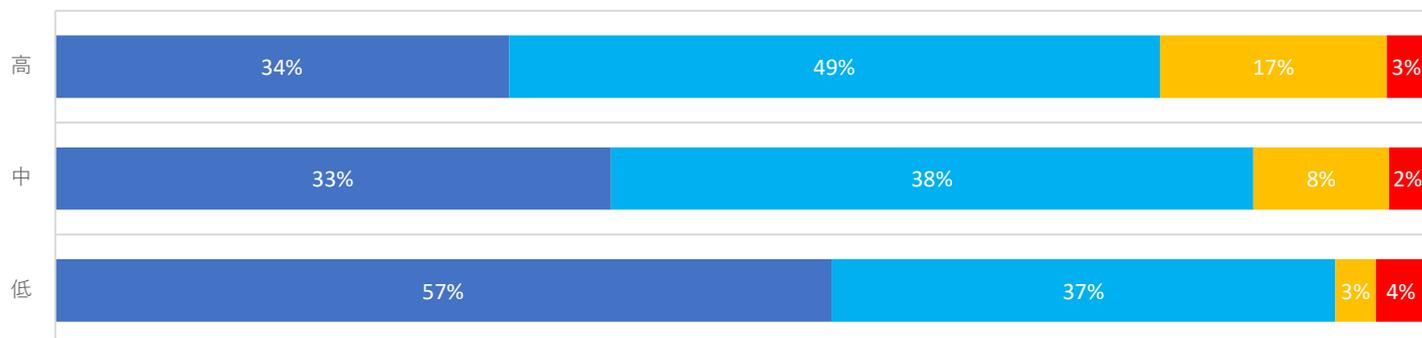
1-(2) 興味や関心をもって、
学習に取り組んでいる。



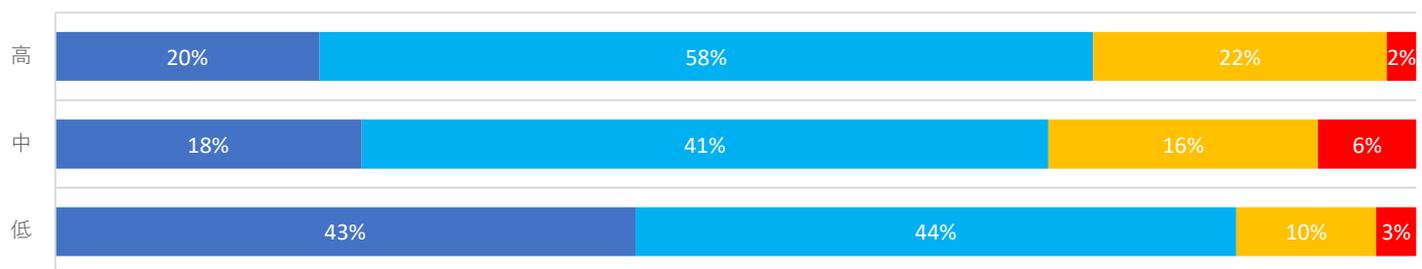
1-(3) 学習したことを、自分の生活と結び
付けて考えている。



1-(4) むずかしいと感じた問題も、最後まで粘り強く取り組んでいる。



1-(5) 授業で新しく学んだことやもっと学習したいことを振り返りに書き、次の学習につなげようとしている。



〈主体的に取り組む態度〉

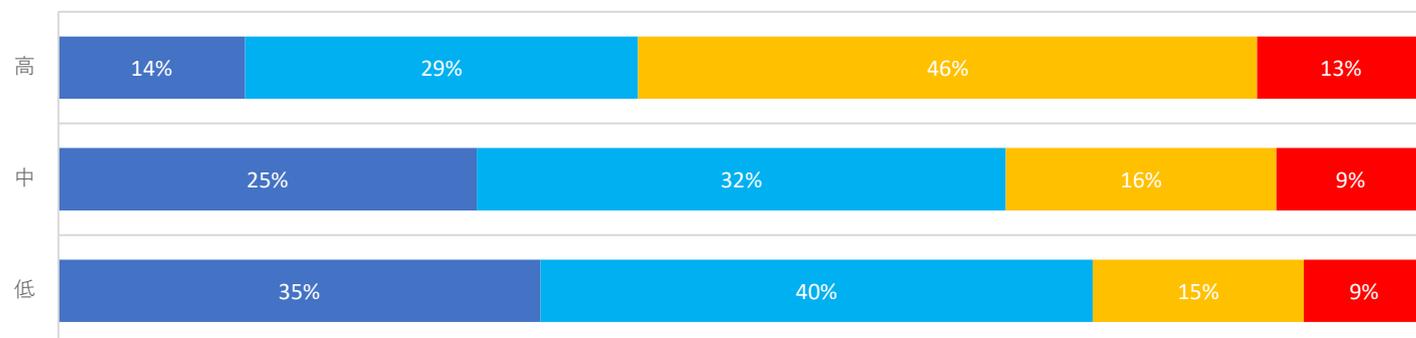
▼5つの質問項目ほとんどが、1学期の調査結果よりもマイナスに転じている。

▼特に、1-(3)「**学習したことを、自分の生活と結び付けて考えている。**」は、全学年でマイナス成長である。質問項目通り、児童が学習の内容が自分の実生活に上手く反映できていない、又は反映の仕方が分からないことを意味している。しかし、1学期よりもポイントが下がったのは、児童が真剣に学習と実生活を結び付けて考える意識が高まってきたことによるものだとも考えられる。

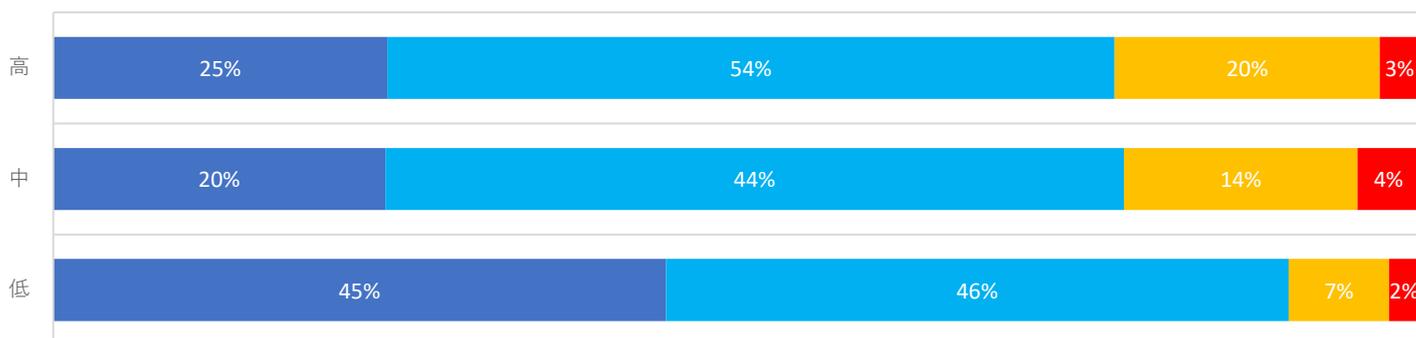
・とりわけ中学年のマイナスポイントが顕著である。学習内容が難しくなってきたこと、学習に対する意識改革が進んできたことによる結果ともいえる。クラス別の調査結果から判断すると、成長が見られる項目もあるため、効果が表れる過渡期であると捉えたい。

★1-(5)「**授業で新しく学んだことやもっと学習したいことを振り返りに書き、次の学習につなげようとしている。**」の結果と合わせても、来年度は、児童が学習したことを普段の生活の中に生かす習慣付けを進めていきたい。

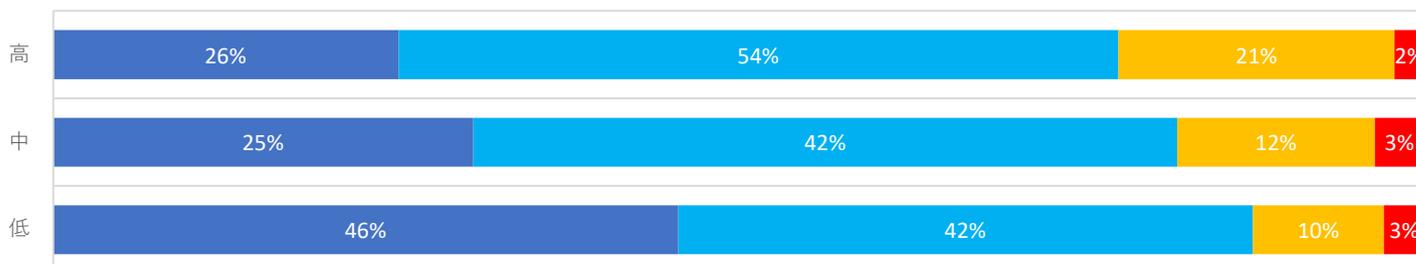
2 - (1) 私は、自分の考えをみんなの前で発表している。



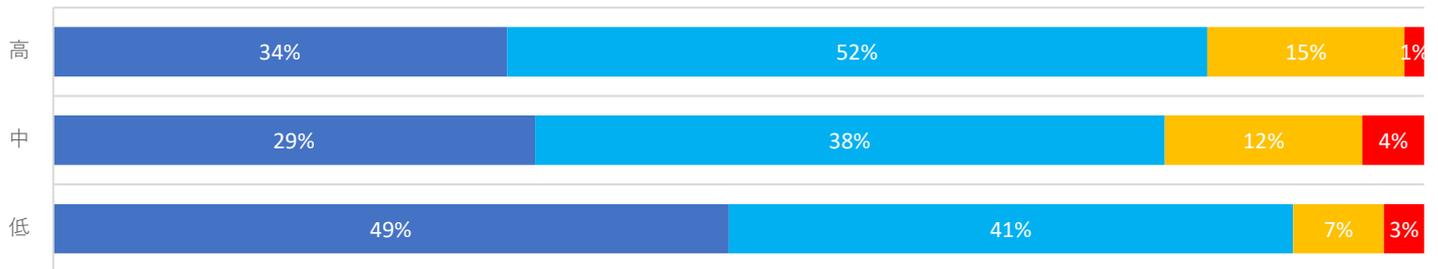
2 - (2) 友達の考えと自分の考えをくらべながら、学習を進めている。



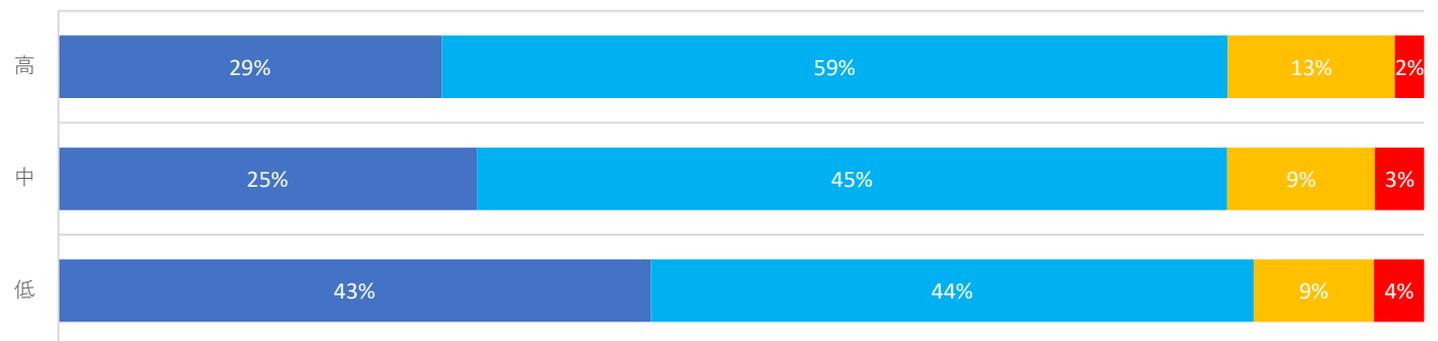
2 - (3) 友達に考えを伝えるとき、必要な方法（言葉や絵、式、身体表現、音など）を選び、相手に伝えるようにしている。



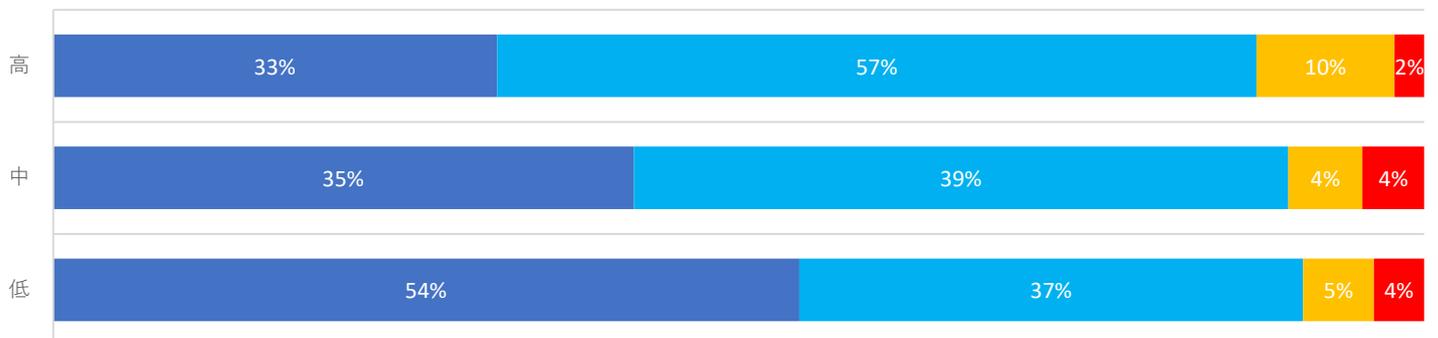
2 - (4) ノートやICTを活用して友達と交流し、理解したことや考えたことを分かりやすく整理している。



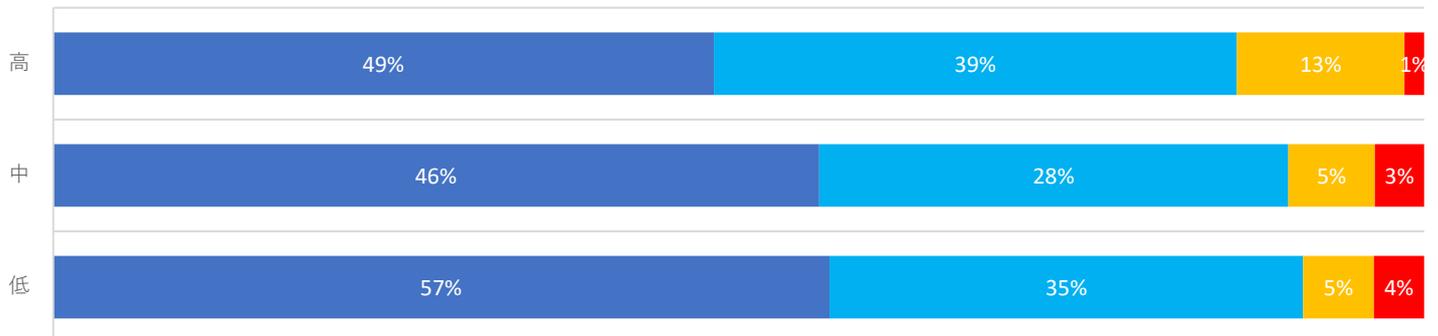
2 - (5) 対話や資料から多様な情報を集めて、学習している。



2 - (6) 問題や課題を解決するとき、先生や友達と一緒に考えて学習を進めている。



2 - (7) よりよい考えに近づくためには、 友達との交流が必要だと考えている。



〈対話的な学習〉

▼対話に関する7つの質問項目中、6項目がマイナス成長である。

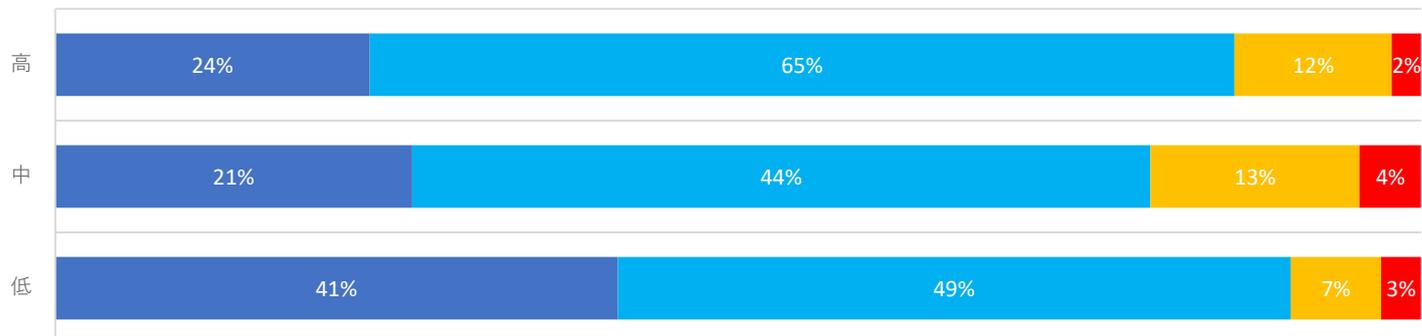
▼2 - (1) 「私は、自分の考えをみんなの前で発表している。」は、昨年度から継続して調査している項目である。本校の特徴的な傾向が如実に表れている。児童の意識の中に、「発表することが苦手」なのか、「発表することに必要感が無い」のか、詳細を児童から調査する必要がある。また、2 - (6) 「問題や課題を解決する時、先生や友達と一緒に考えて学習を進めている。」2 - (7) 「よりよい考えに近づくためには、友達との交流が必要だと考えている。」の結果についても他の見方で考えると、ALに取り組んできた結果、授業の中で対話の時間が増え、少人数で話し合う段階で、結果が出たり、満足した結果が得られたりしている児童がいる可能性がある。一方で、発表の項目と同じように、交流による学習の意味や意義の実感を得られていない児童がいる可能性もある。

◎2 - (5) 「対話や資料から多様な情報を集めて、学習している。」は、どのブロックもプラスに成長していることから、対話には積極的に参加しているが、より高次元の課題解決まで至っていないということが言える。

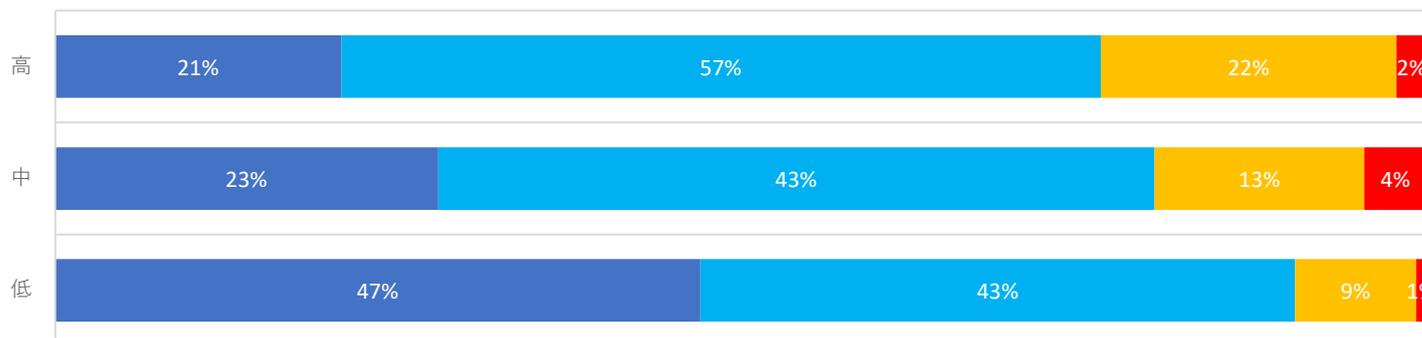
・対話に関する項目も、**中学年のマイナスポイント**が顕著である。〈主体的に取り組む態度〉の項目と同じように、学習内容が難しくなってきたこと、学習に対する意識改革が進んできたことによる結果とも言える。クラス別の調査結果から判断すると、成長が見られる項目もあるため、これについても、効果が表れる過渡期であると捉えたい。

★以上のことから、来年度は「学ぶ必要感」を単元の導入から最後まで継続し、「対話するべき必要感」についても追及していく必要がある。

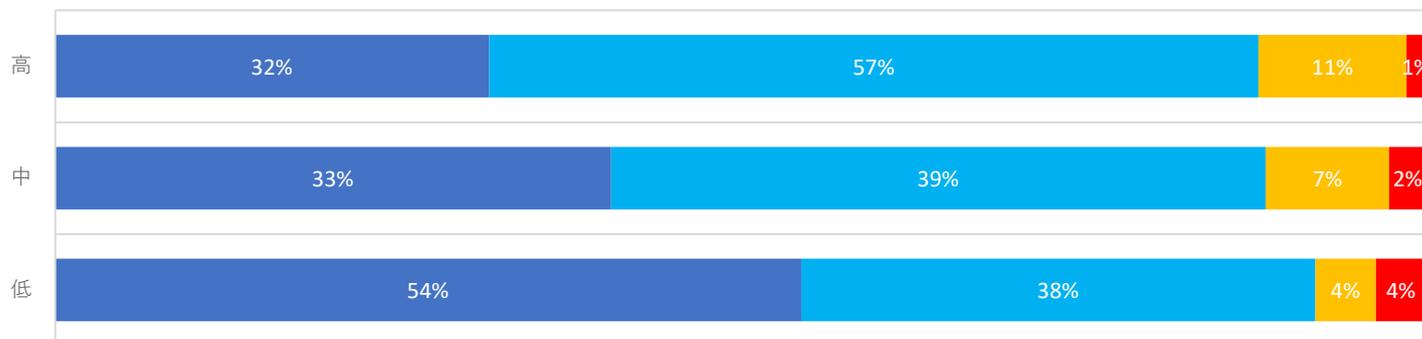
3 - (1) 読み取ったことや調べて分かったことを、自分の考えと結び付けている。



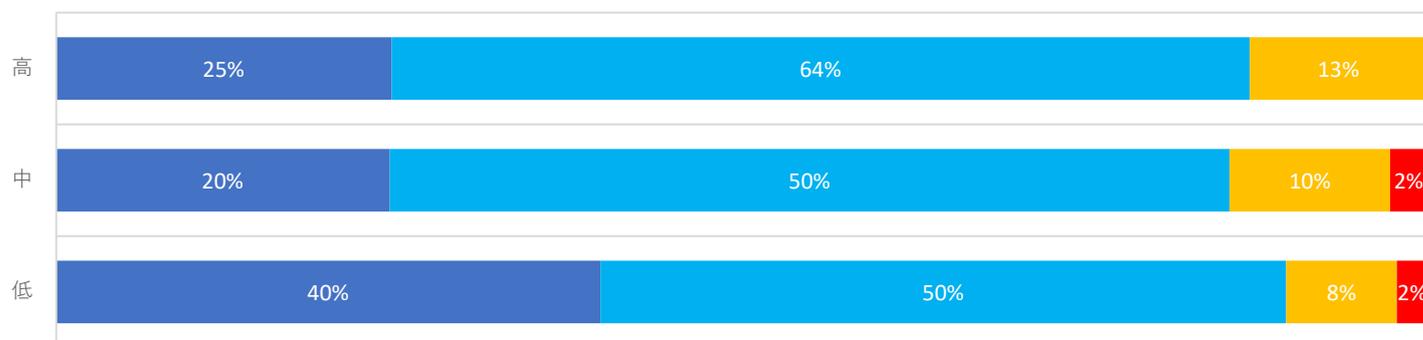
3 - (2) 前に学習したことと、新たに学習したことを関連付けて考えている。



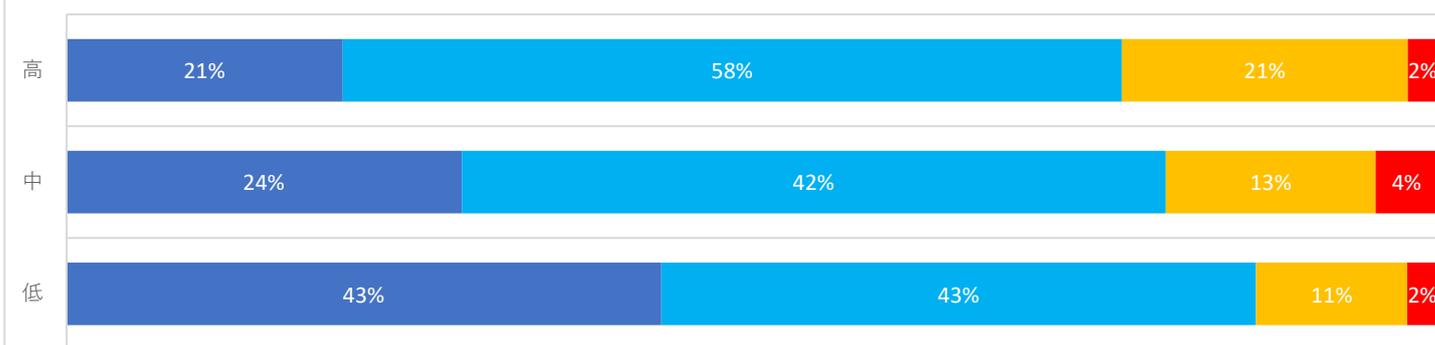
3 - (3) 授業を通して自分ができるようになったことを理解している。



3 - (4) 必要な情報を取り入れて、自分の考えを創り上げている。



3 - (5) 単元の中で、新たな課題を見つけ、解決しながら学習を進めている。



〈深い学び〉

▼深い学びの項目も、あまり芳しい結果とはいえない。

▼**中学年が、やはりマイナス成長**の項目が多い。前項目でも述べてきたが、学習に対する意識が向上した分、児童自身が真剣に自分自身を振り返ることが出来るようになってきたことによる、マイナス成長かと思われる。

▼1学期の「結果・考察」にも記述してある通り、質問項目の内容が児童にとって少し分かりづらいことも考えられるため、児童にとって分かりやすくイメージしやすい文書に直す必要もある。

▼**3 - (4) 「必要な情報を取り入れて、自分の考えを創り上げている。」**も全学年でマイナス成長である。

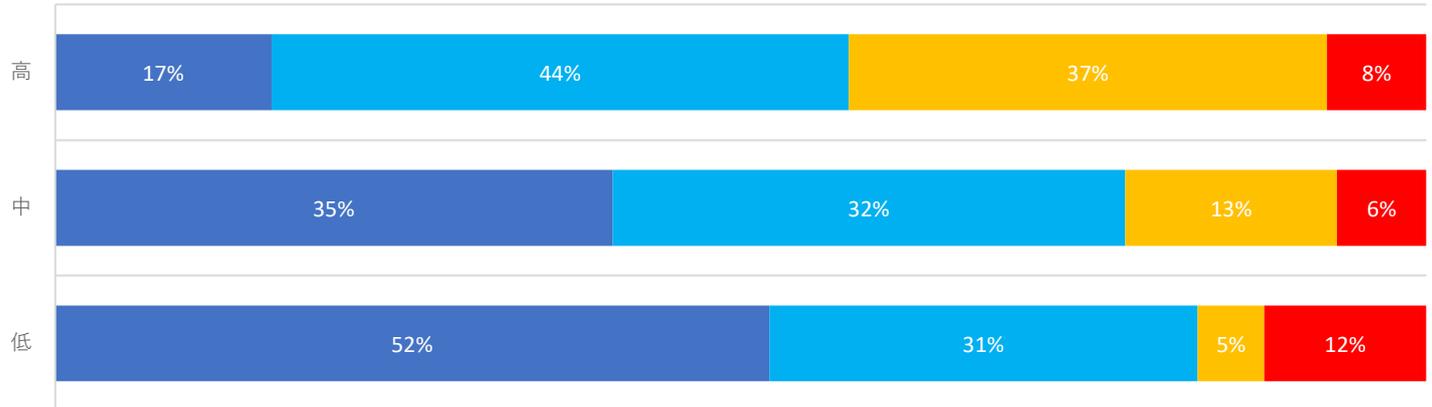
〈対話的な学習〉で挙げた、発表に関する質問項目と関連しているため、この項目の数値を上げていけるよう授業改善をしていく必要がある。

★〈深い学び〉は、児童一人一人が学習者として自分自身をより高めているかを図りたい内容項目である。AL授業を推進し、対話的な学習、協働的な学習を構築していく中で、最終的に児童一人一人の深い学びの実感を伸ばし、学習する姿勢を養っていきたい。

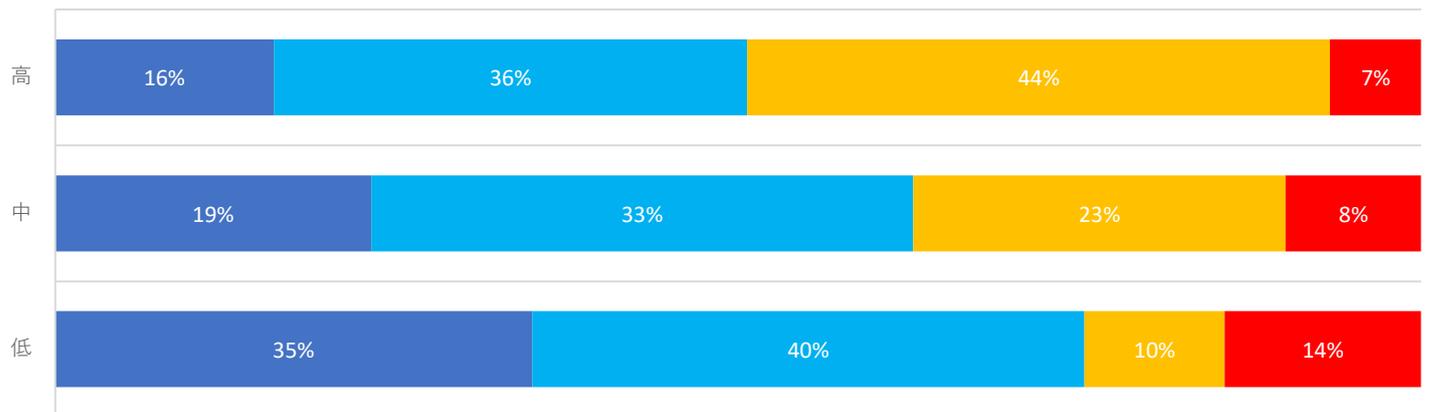
3 調査部

(3) 国語アンケート 1学期

1-(1) 国語の学習は好きですか。



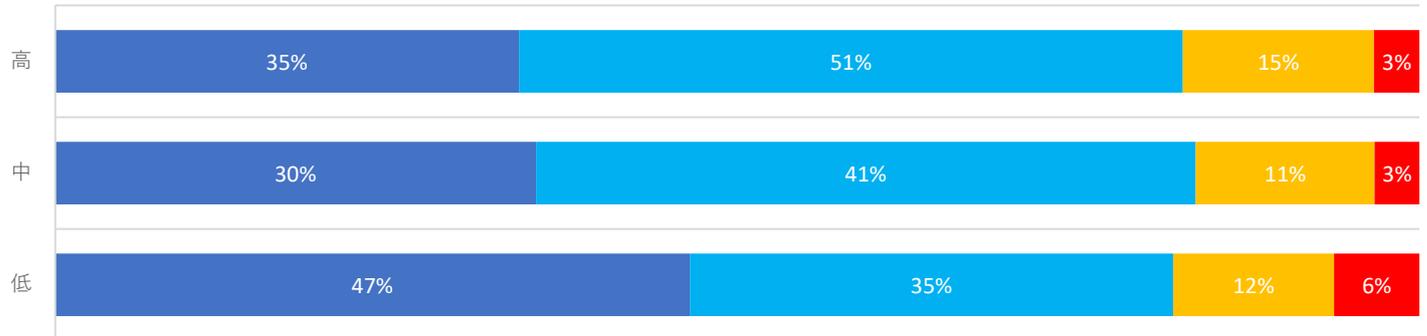
1-(3) 国語の学習は得意ですか。



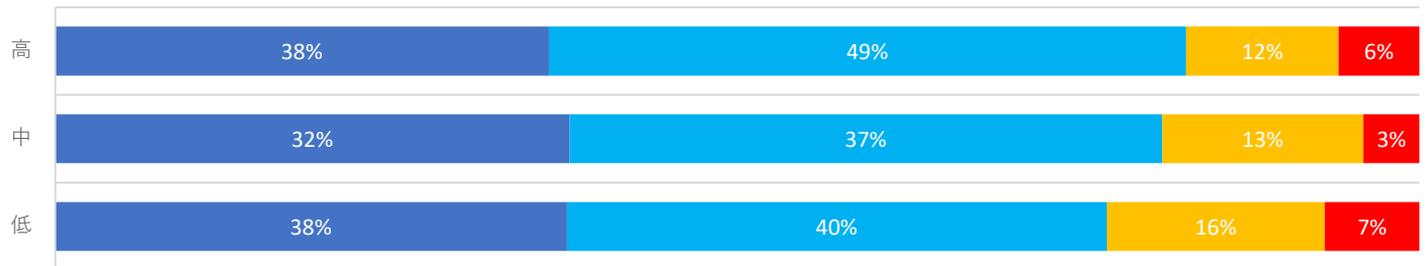
<高学年の主な理由>

- ・漢字と文章を書くのが苦手だから
- ・漢字は好きだけど、文章を考えたりするのが苦手だから
- ・作者の考えをまとめるのが苦手だから。
- ・物語から読み取る問題が苦手だから
- ・最終的に文章を書かないといけないから
- ・気持ちを考えるときかけない時があるから
- ・漢字の問題などは楽しいけれど、物語などの課題はあまり好きではないから
- ・長い文章を読むのが苦手だから。
- ・筆者の主張や段落を書くのが苦手だから
- ・物語文でその登場人物の心情をよみとったりするのが苦手だから
- ・文章を書いたり、説明文を書くのが難しいから
- ・心情を考えるのが難しい

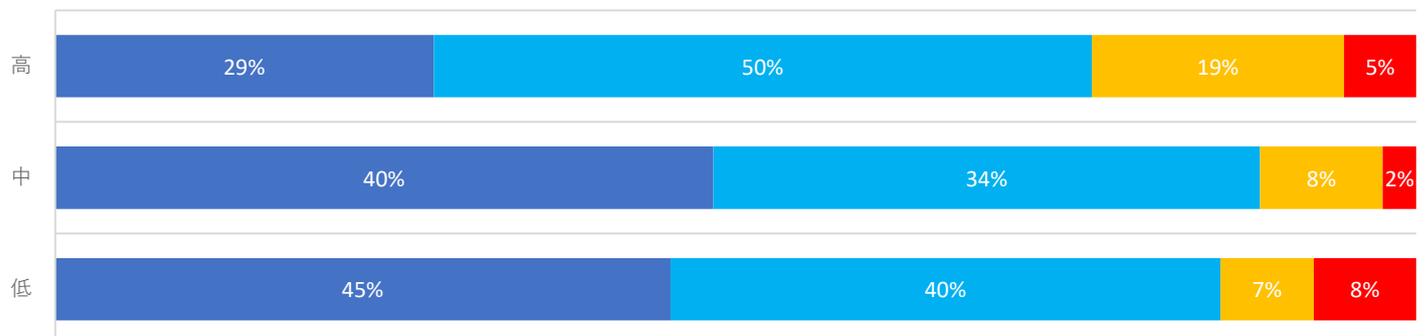
2 - (1) 「話す・聞く」の授業で、事実と感想、意見を区別して、話の構成を考えている。



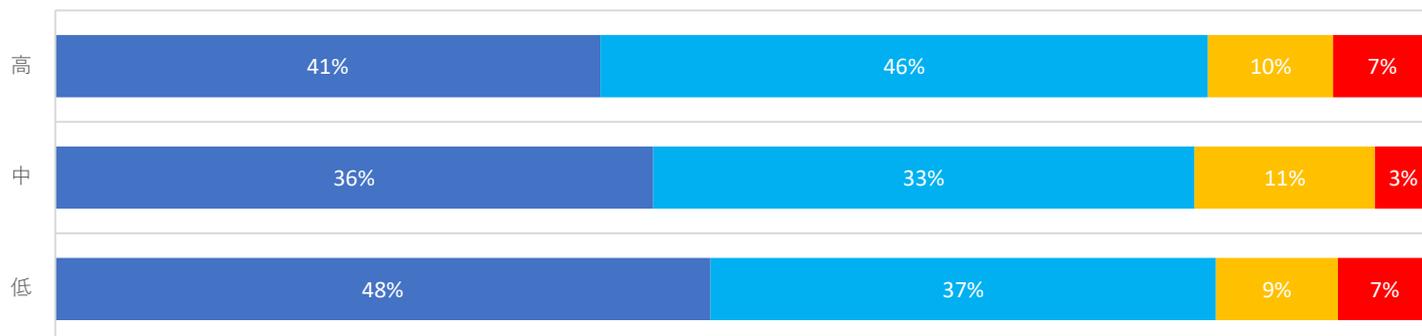
2 - (2) 「話す・聞く」の授業で、資料を活用するなど、自分の考えが伝わるように話し方を工夫している。



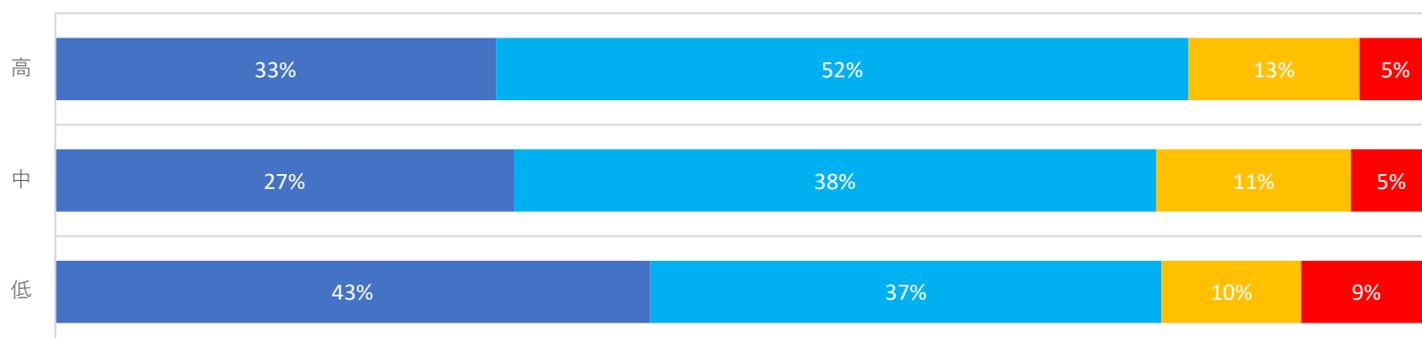
2 - (3) 相手の話を聞き、それと比べながら、自分の意見をまとめている。



3 - (1) 自分の考えが伝わるように、目的や意図に応じて、文章を書いている。



3 - (2) 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、より良い文章に直している。



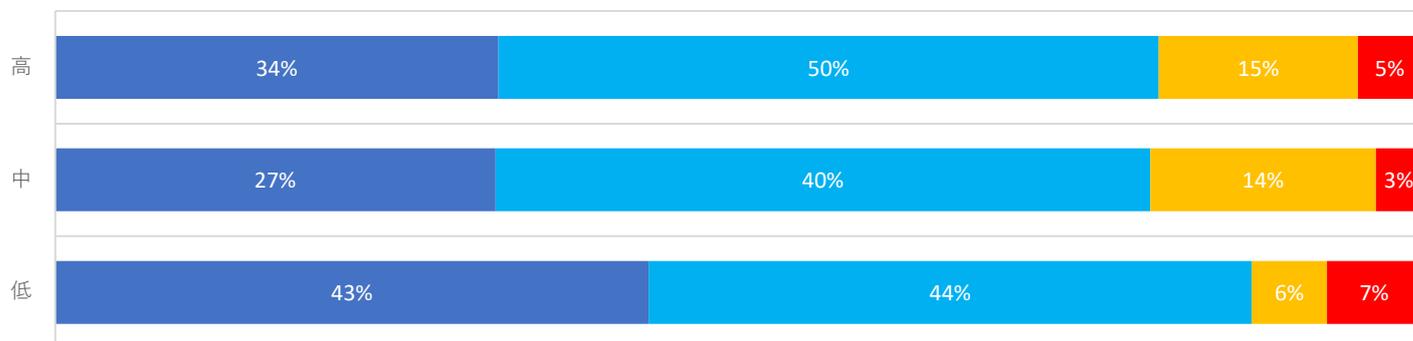
どのアンケートも、あまり大きな違いが見られなかった。

しかし、高学年では2 - (3) 相手の話を聞き、それと比べながら、自分の意見をまとめている。の項目が約15%の児童が否定的な回答だった。この項目は低・中では否定的な回答が見られないので、高学年特有の学習内容も関連している可能性もある。相手の話から、相手の考えを汲み取り、それと自分の考えを比べて、意見としてまとめていくことに課題を感じている児童が多いようだ。

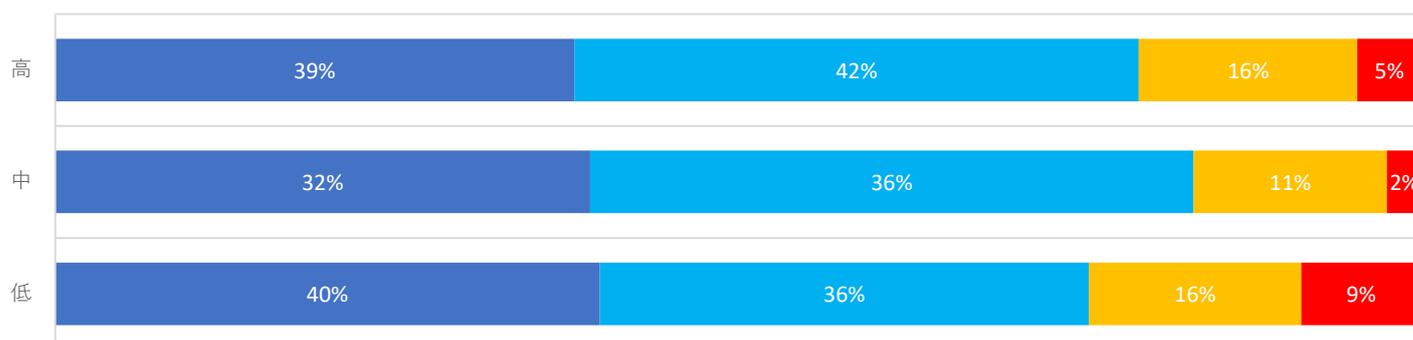
中学年ではどの項目も同じ程度の結果であった。その中では、3 - (2) 相手や目的を意識して、より良い文章に直している。の項目が、約20%の児童が否定的な回答だった。文章の見直しをするときに相手に伝わるか、相手が読んでどう感じるかなどを考えて活動に取り組むめるようにするために、ポイントを抑えてから各自で活動に取り組むことが、相手や目的に応じた文章の校正につながっていく可能性がある。

低学年では、2 - (2) 「話す聞く」の授業で、相手に伝えたい内容や、相手にあわせて、声の大きさや速さなどの工夫をしている。の項目が約21%の児童が否定的な回答だった。低学年ということもあり、相手を意識した話し方や伝え方について、普段からいろいろな方法を試しておく必要があると感じる。

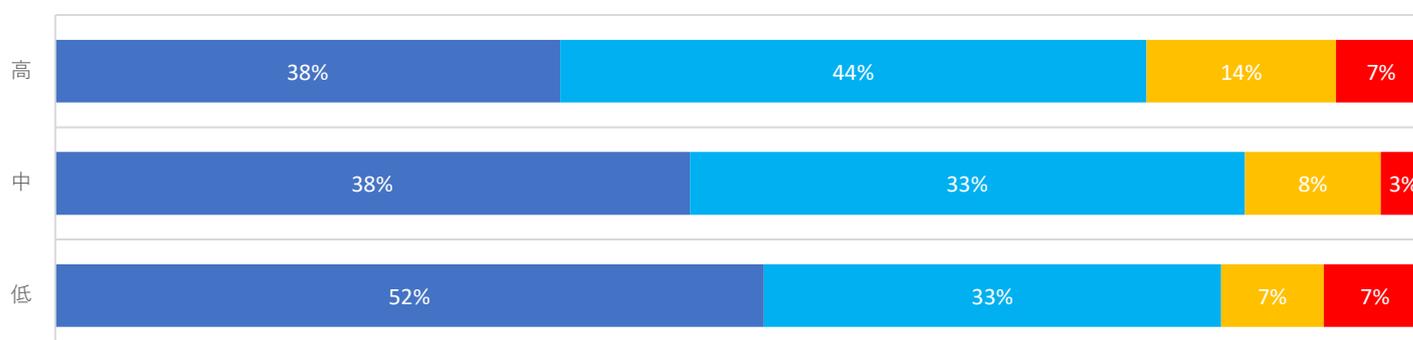
4 - (1) 説明的な文章では、文章全体の構成を捉えて、要旨(文章の最も重要な部分)を理解している。



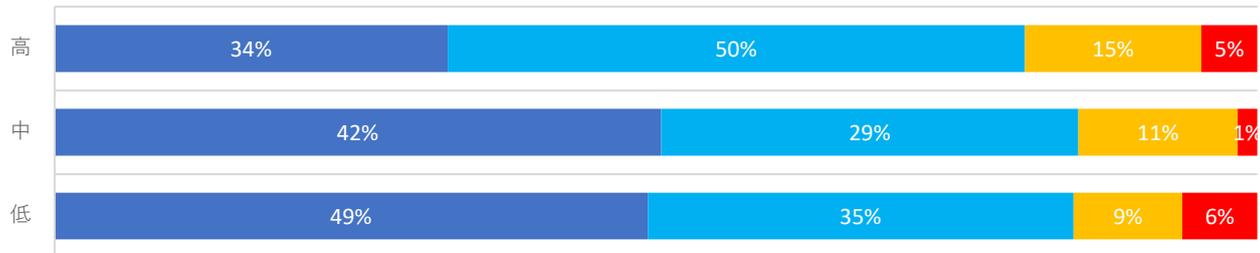
4 - (2) 説明的な文章では、必要な情報を見付けたり、意見や考えの進め方について、考えている。



5 - (1) 文学的な文章では、登場人物の相互関係や心情などを捉えている。



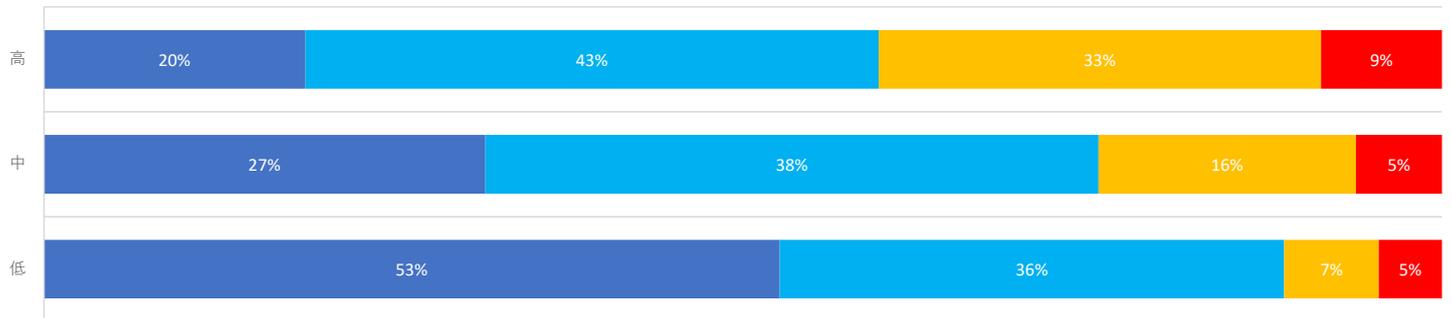
5－(2) 文学的な文章では、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考
えている。



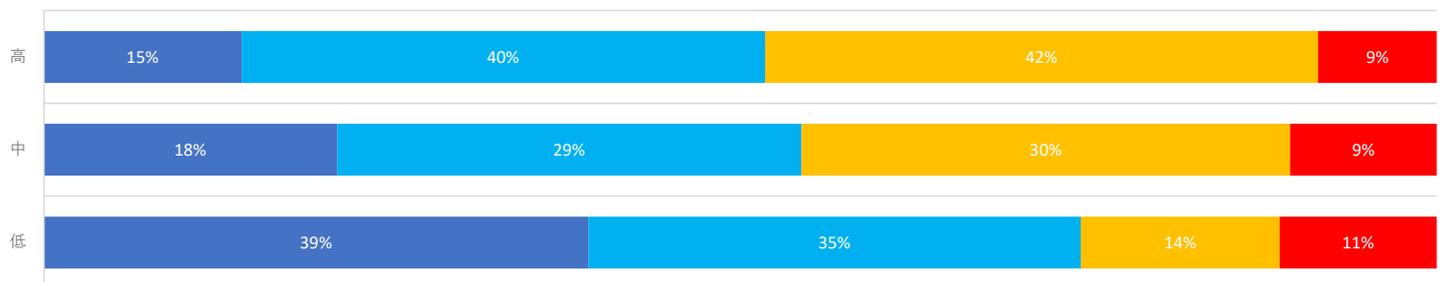
3 調査部

(4) 国語アンケート 3学期

1-(1) 国語の学習は好きですか。



1-(3) 国語の学習は得意ですか。



1-(1)、1-(3)の理由について

高学年の意見を抜粋

<好き>

- ・漢字が好きだから
- ・本を読むのが好きだから
- ・文章を作るのは面倒ですが、おもしろいから
- ・漢字一つ一つの意味が違うから
- ・思ったことを文章にするのが好き

<嫌い>

- ・文章を読んで理解するのが難しいから
- ・漢字が苦手
- ・楽しさを感じられないから

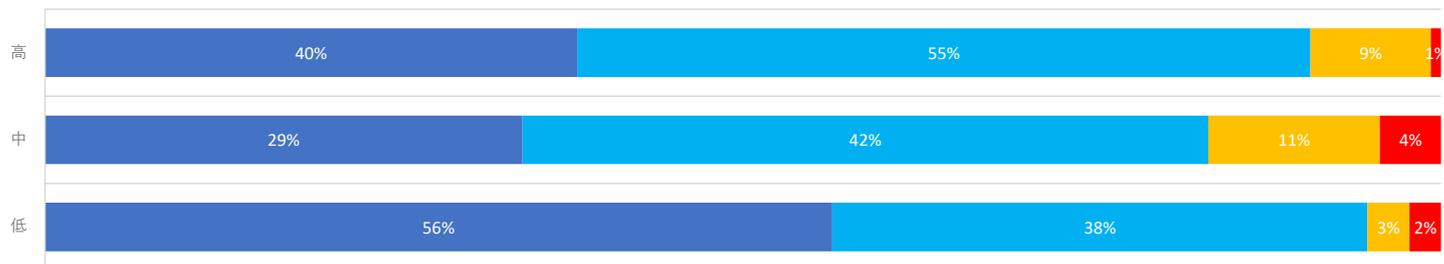
<得意>

- ・テストの点数がよいから
- ・自主学習の予習復習がおもしろいから
- ・文章を書くのが得意だから

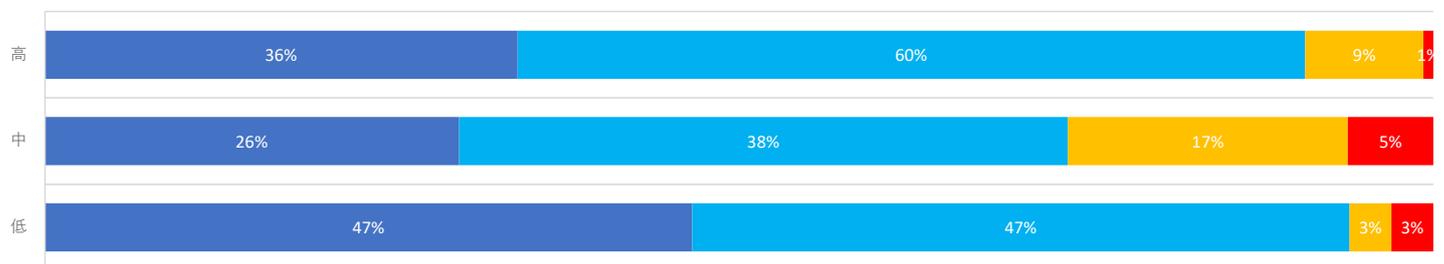
<苦手>

- ・語彙力が少ないから
- ・難しくてやる気が出ないから

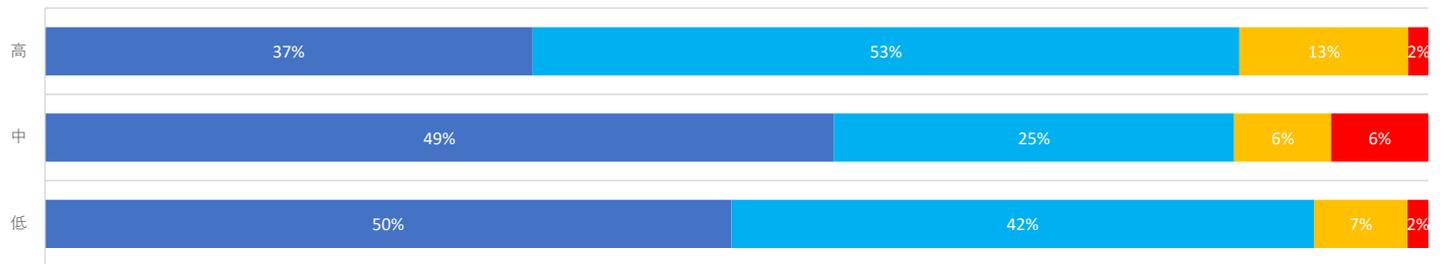
2 - (1) 「話す・聞く」の授業で、事実と感想、意見を区別して、話の構成を考えている。



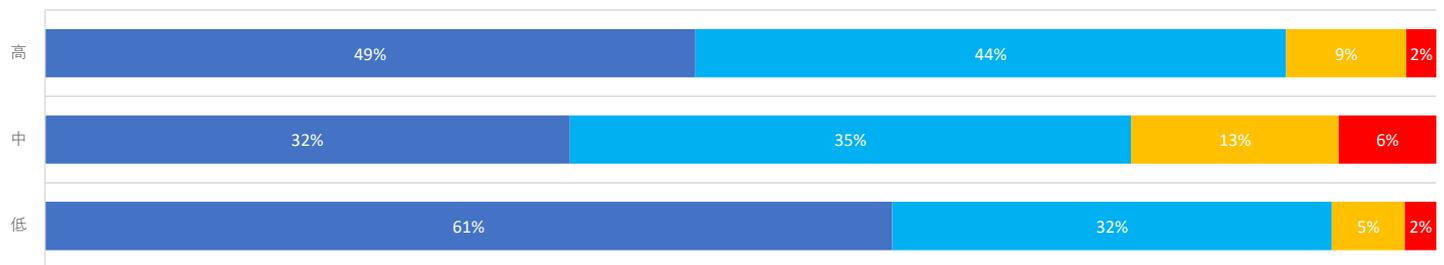
2 - (2) 「話す・聞く」の授業で、資料を活用するなど、自分の考えが伝わるように話し方を工夫している。



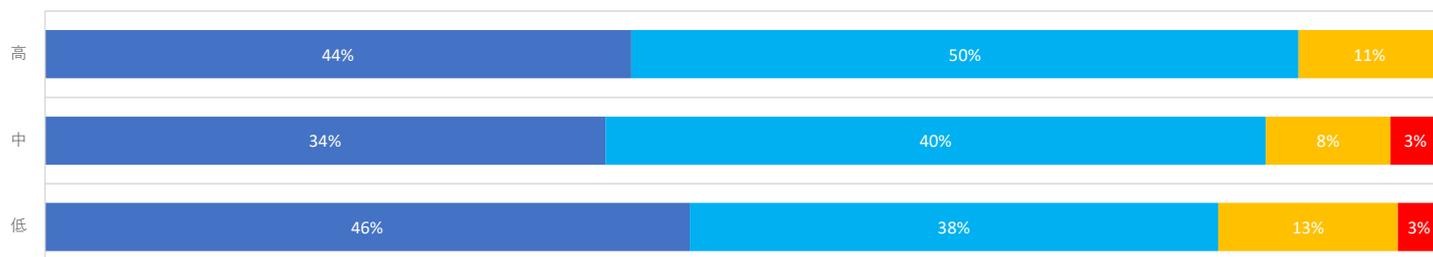
2 - (3) 相手の話を聞き、それと比べながら、自分の意見をまとめている。



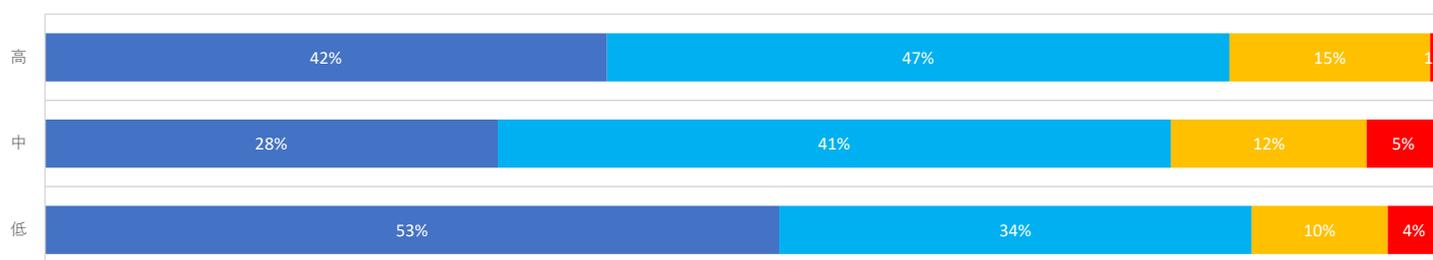
3 - (1) 自分の考えが伝わるように、目的や意図に応じて、文章を書いている。



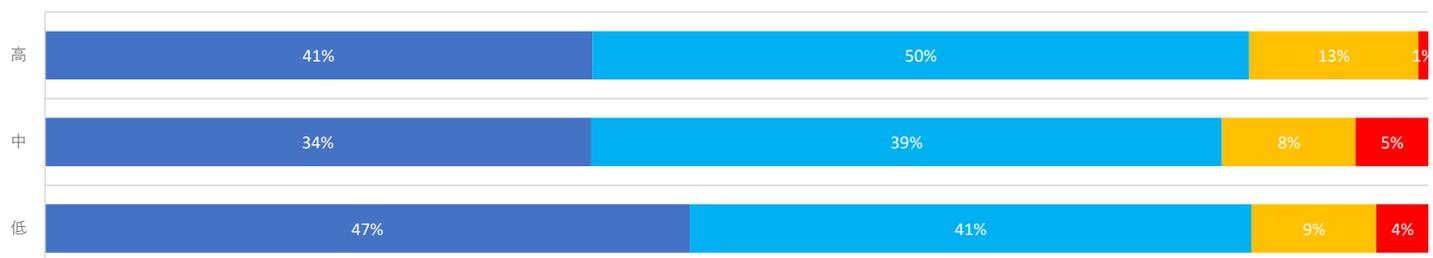
3 - (2) 文章全体の構成や書き表し方などに着目して、より良い文章に直している。



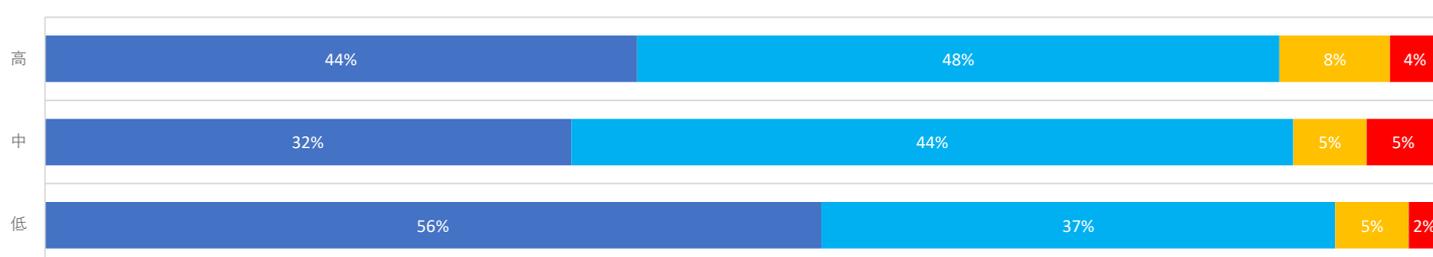
4 - (1) 説明的な文章では、文章全体の構成を捉えて、要旨(文章の最も重要な部分)を理解している。



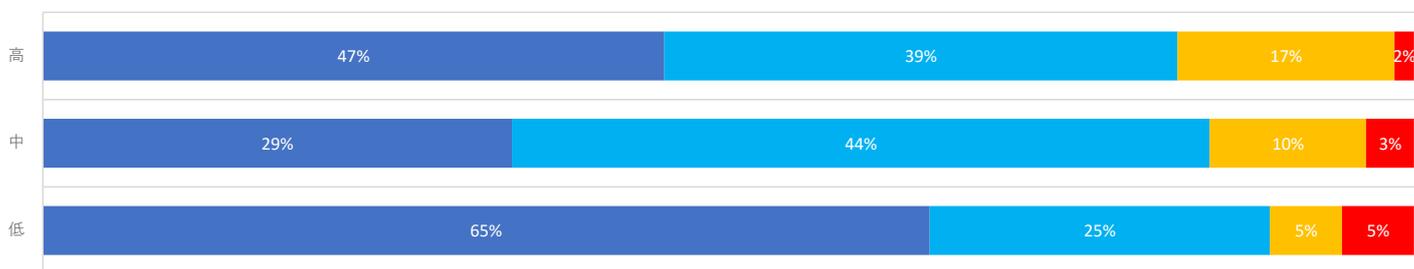
4 - (2) 説明的な文章では、必要な情報を見付けたり、意見や考えの進め方について、考えている。



5 - (2) 文学的な文章では、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えている。



5 - (1) 文学的な文章では、登場人物の相互関係や心情などを捉えている。



- ・ 2の質問項目では、否定的回答が少なくなった。
- ・ 2 - (2) 「話す・聞く」の授業で、資料を活用するなど、自分の考えが伝わるように話し方を工夫している。
→ 全体的に肯定的回答がアップした。特に、低学年での数値アップが大きかった。3学期は、文章を書いて発表する単元が多かったため、学習を通して話し方の工夫を知識として理解し、実践方法を身に付けてきたのだと感じる。
- ・ 5 - (2) 文学的な文章では、人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。
→ 物語文の学習時に、押さえないポイントを教師が意識していくことで、児童もポイントを押さえられたのではないかと考える。また、国語で活用できる技法を学ぶことで、それ以降の文章の中で技法や工夫をみつけられるようになったのではないかと考える。
- ・ 全項目を通して、肯定的な回答の割合がやや増えたことが、研修の成果とみてよいのではないかと考える。

3 調査部

(5) 各学年 考察

	ALについて	国語について
1年	<p>○ふりかえりを記述式に変えたことで、授業で学んだことなどを自由に書くことができるようになった。そのため、1-(5)の項目で次の学習につなげようとしている児童が増えた。</p> <p>○友達との交流時、交流の視点を明確に伝えることで、児童たちは視点を意識しながら自分の意見を伝えることができるようになった。その際、伝わるように絵や文を見せながらなど工夫を取り入れながら活動する児童も増えた。自分の考えだけではなく、広く友達の考えを聞いて意見するという交流の大切さや必要性を実感している児童も多い。</p>	<p>○ワークシートで登場人物の気持ちを考えることが増えたため、全体的に国語に対する苦手意識が減った。</p>
2年	<ul style="list-style-type: none"> ・前回のアンケート結果と差異はなかった。2-(1)「みんなの前で発表をしている」の項目が否定的回答が若干増えた。3学期は、学級全体で発表することや原稿を書くことなどの単元が多かったため、児童の苦手意識につながったのかもしれない。 ・2-(7)「よりよい考えのために、友達との交流が必要だ」と感じている児童が増えた。教師が視点をもって対話を取り入れたことで、友達との意見の比較や、新しい考えに結び付いたのではないかと考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2-(2)「自分の考えが伝わるように話し方を工夫している」のポイントが上がった。ALでも触れたが、3学期の単元構成によるもので、一人一人が経験を積んできた結果と考える。その反面、ALの結果と紐づけると、経験を積むことで得意になった児童と、苦手なことに気づいた児童が分かれたのだと考える。 ・1-(3)「得意ですか」3-(2)「よりよい文章に直している」の質問には、児童自身が自分の立ち位置が分かるようになったからからこそ、否定的に感じるようになってきたのだと考える。
3年	<p>○対話的な学びに取り組んでいる児童が増えた。</p> <p>△「めあてを意識」や「興味・関心」について、児童は肯定的な回答を多くしているが、教師側の実感からすると、そこまで多いとは感じない。</p> <p>△ふりかえりを次の学習につなげることに課題がある。</p> <p>△全体への発表が少ない傾向にある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・より実態を反映したアンケート結果と言える。 ○「読むこと」では、叙述を基にして文章を読み取るようになってきたと感じる。
4年	<p>【前回の数値を学年平均と比較】</p> <p>○必要な情報を収集し、読み取った事や分かったことから自分の考えを構成する力</p>	<p>国語が「好き」「得意」の回答は若干マイナス傾向にある。しかし、「自分の意見をまとめる」、「目的や意図に応じた表現や</p>

	<p>が高まった。</p> <p>○よりよい考えにしていけるために、交流の必要性に気づき、その結果、自分が単元を通して身に付いた力を実感できている。</p> <p>▼学習内容を生活と結びつけて考えることに課題がある。→単元の導入で、具体的な場面を想起させる。</p> <p>▼学習中に新たな課題を見つけ、解決しながら学習を進めることが苦手である。→余剰時間を確保し、課題を見つけ、解決することで理解が深まることを意識させる。単元によって根本的な授業展開の創造をする。</p>	<p>推敲」、「文章の構成理解」はプラス傾向が見られた。学習内容の難易度の上昇もあるが、児童の力は向上していると考えられる。</p> <p>要因として、「取り扱う単元の順番を入れ替えたこと」、「【書く】を中心とした単元計画」、「学期を貫く評価指導（ループリック表）」が考えられる。</p>
5年	<ul style="list-style-type: none"> ・教師が意識的に授業改善を行っていることは児童にも伝わっているが、未だ発表に対する意欲の低さや恥ずかしさ等の課題が残った。 →△個々の自信 ・ICT機器の活用が、「推敲してより分かりやすく伝えようとする」場面において活発な言語活動の手助けに繋がった。 ・自己の言語能力の向上に伴って、自身の考えに自信をもつことができたことで、他者との交流する必要性が低下してしまった。 →より効果的な場面での話し合い活動の意図的設定が必要。 ・国語科の中で自身と叙述とを関連づけて考える事に難しさを感じる。捉えにくい場面だからこそ、話し合う必要観を持たせて、ALに迫る授業改善が求められていると考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語の授業に力を入れた結果、児童自身が“国語”を難しく捉えている傾向が見られた。 ・説明文における文章構成を捉えたり、必要な情報を見つけたりする活動を通して、「読む力」が向上したといえる。 ・文学的な文章における登場人物の相互関係や物語の全体像を捉える点で、中位層が減少し、上位層の向上が見られた。 →全体的な伸びに…
6年	<p>全体的に肯定的な意見の割合が伸びていた。特に「話す・聞く」については、自分の意見の伝え方や相手の意見の聞き方、またそれを自分の考えにどのように生かしていくかについて、児童の肯定的な捉えの割合が伸びた。授業で、意図的に取り入れたことに加え、児童が効果を実感できるよう、丁寧に振り返りを行った結果と捉えている。</p>	<p>全体的にみると、伸びがあまり見られなかった。唯一、交流に関することが大きな伸びが見られた。意図的な指導が実を結んだと感じる。一方で、肯定的な意見が減ったものが、あったものに関しては、来年度の課題として、意識して指導していきたい。</p>

4 授業研究部 (1) 指導案の形式

第 学年 組 国語科学習指導案 (型) (例)

基本は、
埼玉県小学校教育課程指導・評価資料
に準じて作成にあたる。

令和 年 月 日 (月) 第 5 校時
在籍児童数 名
場 所 第 学年 組 教室
指 導 者 教諭

1 単元名・教材名

2 児童の実態と本単元の意図

(1) 児童観

本学級の児童は、

国語に関する実態調査の結果を見ると、

対話的な学習については、

(2) 教材観

本単元は、学習指導要領における第 学年及び第 学年の「B 書くこと」の指導事項「(1) イ」を受けて設定したものである。

(3) 指導観

～することで、より学習の必然性と必要性を高めることができる。

～を通して～に気付かせる。

～することで～を考えさせる。

～の学習において、～については特に丁寧に確認をしていく。

3 本単元における言語活動

①

②

4 校内研究との関わり

(1) 研究主題 「主体的・対話的で深い学びの創造～ICTを活用した授業実践を通して～」

(2) (低・中・校) 学年の児童の実態

- ・
- ・
- ・
- ・

(3) 研究仮説

児童の学習意欲を大切にするために、取り組みやすい課題やICTの活用による学習環境を工夫し、子供たち同士の対話的な活動によって課題を解決できるようにしていく。そして、何が分かり、何ができるようになったのかを実感させる振り返りをすることで、その学びを生かした次の学びへの意欲を高める。こうした経験を繰り返すことで学びに向かう力を育てていく。

(4) 手立て

① つかむ

A 必要性、必然性のある課題提示の工夫

- ・ 児童の身近な題材から課題を設定する。
- ・ 疑問や驚きを生み出す提示の工夫をする。

B ルーブリック評価の活用

- ・ 「①つかむ」の段階で、振り返りの視点を明確にし、「④振り返る」において児童の自己肯定感が高まる評価（ルーブリック評価）ができるようにロイロノートを活用する（ICTの活用）

② 考える

A 問題に取り組む時間の確保

- ・ 既習事項を振り返りながら、自分なりの考えを書きだす時間を確保する。

B 考えを可視化するためのICTの活用

- ・ ロイロノートを活用し、自分の考えを整理する。（ICTの活用）

③ 深める

A 話し合いの視点の明確化

- ・ 話し合いの際に、話し合うねらいと視点を明確にする。

B 話し合いの話形を示す

- ・ 話し合いの際に、意識させる話形を提示することで双方向のやりとりを意識させる。

④ 振り返る

A メタ認知を意識させる。

- ・ 自分の学び方を振り返らせ、次の学びへの意欲を高めさせる。
- ・ ルーブリック評価を行うことで、今の自分を振り返る。（ICTの活用）

5 単元の目標

- (1) (知識及び技能)
 (2) (思考力、判断力、表現力等)
 (3) (学びに向かう力、人間性等)

6 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① ②	①	①

7 指導と評価の計画 (全 時間扱い)

時	主な学習活動	指導上の留意点	評価規準と評価方法
1	○ ○	・ ・	【態】 [発言・記述]
3 4 5	○	・	【知】 [発言・記述]
6	○	・	【思】 [記述]
7 8	○ ○	・ ・	【知】 [資料・ノート・ロイロノート] 【思】
9 10 本時	○ ・ (本時)	・	[資料・ノート・ロイロノート] 【態】
11 12 13	○ ○	・ ・	[資料・ノート・ロイロノート]
14	○	・	

--	--	--	--

8 本時の学習指導（本時 / 時）

(1) 目標

○

（思考力、判断力、表現力等）

(2) 評価規準

○

【思考・判断・表現】

(3) 展開

	学習活動	学習内容	指導上の留意点・評価 ★校内研修との関わり	時
① つかむ	1 前時までの学習を振り返り、本時の課題を確認する。		★手立て①-A 必要性・必然性のある課題提示の工夫	3
	課題			
	2 本時の活動の見通しをもつ。 ① (個人) ② (任意) ③ (グループ)		○	3
	3 本時のめあてを確認する。		○	3
	めあて			
② 考える	ループリック評価 ・レベル1 ～することができた。 ・レベル2 ・レベル3			
	4 〈期待される児童の反応例〉 ・ ・ ・		<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>〈評価規準〉 【思考・判断・表現】 ～を考えている。</p> <p>〈評価方法〉 資料・ノート・ロイロノート</p> <p>・～している児童を B とする。</p> <p>〈「努力を要する」状況 (C) への手立て〉 ・～にさせる。</p> </div>	

③ 深める	5		★手立て②-B 考えを可視化するための ICT の活用（ロイロノート）	
④ ふりかえる	6 学習の振り返りをする。 ① ②			10

9 板書計画

(1) 単元の評価

	読むこと 「馬のおもちゃの作り方」 「けん玉の作り方」	書くこと 「おもちゃの作り方をせつめいしよう」
	事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。	事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。
レベル1	<p>「馬のおもちゃの作り方」から、複数の「説明の工夫」に気を付けて読めた。</p> <p>①文章のまとまりの工夫 <はじめ><材料と道具><作り方> <楽しみ方></p> <p>②<作り方>の順序と順序表す言葉の工夫 「まず」「つぎに」「それから」</p> <p>③長さや量を数字にする工夫</p> <p>④図や写真を効果的に使う工夫</p> <p>⑤短い文にする工夫</p>	<p>学習した「説明の工夫」を使い、1年生にもわかりやすい「おもちゃの作り方」を書くことができた。</p> <p>①文章のまとまりの工夫 <はじめ><材料と道具><作り方> <楽しみ方></p> <p>②<作り方>の順序と順序表す言葉の工夫 「まず」「つぎに」「それから」</p> <p>③長さや量を数字にする工夫</p> <p>④図や写真を効果的に使う工夫</p> <p>⑤短い文にする工夫</p>
レベル2	レベル1と児童自身の差を埋める内容を、児童自ら考える欄	レベル1と児童自身の差を埋める内容を、児童自ら考える欄
レベル3	「馬のおもちゃの作り方」から、文章のまとまりに気を付けて読めた。	文章のまとまりに気を付けて、「おもちゃの作り方」を書くことができた。

(2) 本時の評価 (10 / 14時)

	書くこと
	<作り方>の説明の順序を考えること。
レベル1	<作り方>の順序にそって、自分のカードを並び替え、まとめることができた。
レベル2	<作り方>の順序にそって、自分のカードを並び替えることができた。
レベル3	<作り方>に必要な作業を考え、カードに書くことができた。

単元の評価

	第2時	第3、4時	第5、7時	第6時（本時）
	①文の中で語句の係り方や語順、文と文との接続の関係、話や文章の構成や展開、話や文章の種類とその特徴について理解すること。 (知識)	②事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。 (思考)	③文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。 (思考)	④文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること (思考)
レベル3	3つのまとまりと、その根拠を2つ以上見つけることができた。	事例と筆者の意見の内容と事例を挙げる効果を本文から押さえ、文章全体の構成を捉えて、筆者の主張と事例とのつながりについて読み取ることができた。	持っている知識や理解した内容と筆者の考えを結びつけて、自分の考えを書くことができた。	友達の考えとの共通点や相違点に着目し、それらを取り入れながら、複数の視点で自分の考えを広げることができた。
レベル2	3つのまとまりと、その根拠を1つ見つけることができた。	事例と筆者の意見の内容を本文から押さえ、文章全体の構成を捉えて、筆者の主張を読み取ることができた。	筆者の考えを用いて、自分の考えを書くことができた。	友達の考えとの共通点や相違点に着目し、自分の考えを広げることができた。
レベル1	3つのまとまりがわかった	事例と筆者の意見が書かれた部分を本文から押さえ、初め・中・終わりの構成と、筆者の主張が書かれた段落を見つけることができた。	自分の考えを書くことができた。	友達の考えとの共通点や相違点に気付くことができた。

4 授業研究部

(2) 手立て集

授業研究部 手立て集

～アクティブ・ラーニングを活発にするための手立て～

つかむ

① 具体物による課題提示

実践例

国語：単元のゴールである民話紹介を、担任が実演する。

良い例と悪い例を提示し、比較をする。

国語：ゴールのイメージをもたせるために、過去の卒業文集の文章を読み聞かせる。

算数：おはじきやブロックなど興味あるものを使用する。

折り紙を問題の大きさに折るなどの具体物操作をする。

② 必要性、必然性のある課題提示

社会：自分達で育てているにんじんがうまく育たなかった。農家の人はどんな工夫をして育てているのか、知りたい。

ゴミ調べをすると家庭からどんなごみが多く出ているか分かったので、自分たちにできる削減方法を考えさせる。

国語：聞くことの意義を確認し、必要感のある単元目標を提示する。

国語：これから書く文章が卒業文集に繋がることを伝え、過去の卒業文集を紹介する。

国語：新聞記事の読み取りから、考える幅の狭さに気付き、教材文への必要感を高める。

国語：文章を書いて伝える、考えや思ったことを言葉で伝えるときに、誰に伝えるのか相手を明確にする。

方

③ 問題解決や創作表現の学習プロセスを児童に設定させる

国語：感想文を書くというゴールを達成するには、教材文を読む際、どんなことを意識して読み進めばよいかを考えさせる。

理科：時間がたつと太陽の向きが変わることを調べるには、どのようなものを使って、どんなふうに見ればよいか計画を立てさせる。

社会：スーパーマーケットの工夫をまとめる際、ロイロでまとめるのか紙面でまとめるか等、自分で

算数：課題解決の際に、図や計算、数直線、言葉による説明など考えを表す方法を自分で選ばせる。

れ

観

選

④ ルーブリック評価の活用

児童と一緒にルーブリックを作ることによって、目標をもって取り組める。

全教科：学習前に自分がどの程度、目標との距離があるか理解させ、目標達成に向け、見通しを持って学習に取り組ませる。

考える

① 問題に取り組む時間の確保

算数：問題を一人で解く時間を十分に取る。

途中でヒントを出す。

国語・算数：既習事項を振り返りながら自分なりの考えを書き出す時間を確保する。

② 資料読み取り

社会：複数の資料を読み取り、比較したり関連づけたりして、自分の考えを持たせる。

③課題を見つける

体育:鉄棒、マット運動、跳び箱等、自分の動きを動画撮影し、自己の課題を発見させる。

算数:これまでの学習内容を生かし、自分たちで課題を立てさせる。

④モデル提示:考えの「モデル」を掲示し、可視化する。

算数:課題解決の前に既存の知識と関連付けて見通しを持たせ、全員が自分の考えを持てるようにする。

深める

①何のため(関係性・比較・分類・統合)に話し合うのか、何を伝えるのか、ねらいを明確にする。

②他者の気づきの視点を基に、再考させる。

③目的に合ったグループの人数、構成を工夫する。

④伝えることの可視化、操作化など思考を深めるツールを工夫する。

⑤推敲

国語:相手の文章を読み、互いにアドバイスをし合う。ロイロノートでのやり取りと直接カードに書いて渡すやりとりを選択し、よりよくできるところを相手に伝える。

⑥調べる

⑦比較する(他者・自己変容・資料)

⑧ジグソー法

・あるテーマを3つの視点に分け、同じ視点で学ぶグループ(エキスパート班)と、違う視点で学ぶグループ(ジグソー班)をつくる。2つの班での学習を交互に繰り返し、学びを深める協同学習法。

振り返る

①メタ認知を意識させる

全教科:自分の学び方を振り返らせ、次の学びへの意欲を高めさせる。

ルーブリック評価を使うことで、今日の自分を振り返る。

自己調整させる。

全教科:友達からの称賛場面の設定

②生かす

社会:新たに得た知識をもとに、社会の一員としての自分ができること、したいことを考える。

全教科:単元前と自己の評価や技能を比較することで、他教科や生活場面でも生かそうとする意欲を高めさせる。

③喜びや達成感

図工、音楽:創作表現の喜びや達成感を感じさせるために、鑑賞し合う。

4 授業研究部
(3) 情報活用能力シート

情報活用能力シート		令和4年度 授業研究部									
		1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生				
基本的な機能	写真を撮る	○	○	○	○	○	○	○・・・使える △・・・使える児童もいる －・・・使えない(使わない)			
	写真をはりつける	－	○	○	○	○	○				
	ネットで調べる	－	○	○	○	○	○				
	手書き入力できる	○	○	○	○	○	○				
	音声入力ができる	○	○	○	○	○	○				
	キーボード入力ができる	△	△	○	○	○	○				
	読み上げ機能を使う	－	－	○	○	○	○				
Google	Googleミート	○	○	○	○	○	○				
	クラスルーム	○	○	○	○	○	○				
	Googleフォーム(作る)	－	－	△	○	○	○				
	Googleチャット	－	－	－	－	－	△	※毎年トラブルになっているので扱い注意			
	Googleドライブ	－	－	－	○	○	○				
	ジャムボード	－	－	－	－	－	－				
	スライド	－	－	△	○	○	○				
	ドキュメント	－	－	○	○	○	○				
	スプレッドシート	－	－	－	－	－	－				
	翻訳					○	○				
ロイロノート	テキストカードを作成できる	○	○	○	○	○	○				
	画像を挿入できる	○	○	○	○	○	○				
	生徒間通信ができる	○	○	○	○	○	○				
	シンキングツールを使う	－	－	△	△	△	△				
	課題を提出できる	○	○	○	○	○	○				
	プレゼン資料を作成できる	－	○	○	○	○	○				
	共有ノート			○	○	○	○				
テストカード				○	－	－					
その他	スクラッチ	－	－	○	○	○	○				
	ウゴトル	－	－	－	－	－	－				
	Sagasokka総合百科事典 ポプラディア	○	○	○	○	○	○				

5 環境部

(2) タイピング検定実施状況

1 ねらい

児童一人ひとりのタイピング能力をあげ、学習効率を高める。

2 日時

- ・来年度から、毎月第一月曜日に高学年、木曜日に低学年、金曜日に中学年が実施する。
- ・今年度は2月から実施し、2回行った。

3 タイピングの種類

低学年：赤ねこタイピング 中・高学年：e-タイピング

4 実施方法

- ①担任がクラスルームのストリームにタイピングサイトを貼りつけ、共有する。
- ②タイピングサイトは、ロイロノートの資料箱より担任がコピーする。
- ③実施後、教員の指示のもと児童同士で検定表にチェックする。

※実施後の記録が保存できないため、

スクリーンショット（Ctrl+ウィンドウ表示キー）の画像 をとらせる。



5 実施における約束

- ①実施については、担任の指示のもと行うこととする（休み時間の使用はしばらく不可とする）。
- ②記録表は、担任保管とする。

6 タイピング技能の実態（R5 3月現在） 【中・高学年の平均】

入力文字数	261 字
ミス	16 字
正確率	224
入力時間	3分間
レベル	C
スコア	124~140
タイピング検定表の級	6級

7 考察

・タイピングの目標レベル

小学生が身に付けるべきタイピングのスキルは卒業までに10分間に100字~200字程度が目安とされている（文科省が目標としている文字数）。小学校高学年では、より正確に入力。

- ・本校の低学年は、正しいホームポジションと正しい指使いを覚え、あ行~わ行までの短文字入力や名前をローマ字入力までできるように目標にしてきた。**赤ねこタイピング**で、銀賞以上を合格として、ローマ字タイピング検定を行った。概ねの低学年の児童は、タイピング向上に向けた基礎はできたと考える。

- ・中、高学年は**e-タイピング**を使い、平均のレベルはCであった。個人的な用途でのパソコン利用には

問題のないレベルである。正確さを意識してさらにスコアアップを目指すことが、学習の中でスムーズに使いこなすための課題と言える。

〈教員の声〉

- 検定があることで、意欲的に取り組んでいた。
- 検定として級が出るので、意欲的に取り組んでいた。
- ローマ字の上達も確実に繋がっている。

▼タイピング練習の時間を授業時間では与えられていなかった（たまにテストを早く終えた児童にやらせる程度だった）ので、はなまるタイムなどで作れたらと思う。

▼日常的にタイピング練習を行わないと技能向上は望めない。

〈児童の声〉

- 検定に合格するために、練習できる時間は一生懸命練習した。
- ロイロノートなどで振り返りカードに書く時間が早くなった。
- 低学年では、手書きから、文字打ちに変わった。自分の名前を入力できるようになった。
- レベルがあったからもうまくなりたいたいという気持ちがわいた。
- もっと速く打てるようになりたいと思った。
- ▼練習をする時間がほしいです。
- ▼長文を打つのが難しかった。

8 今後

今年度は学校での実施を中心とし、来年度は家庭学習での取組も加えていく。

6 来年度へ向けて

成果と課題

今年度は、研究主題である「主体的・対話的で深い学びの創造 ～ICTを活用した授業実践を通して～」に対して、より一層深く迫ることが出来た1年間であった。具体的には、①ALの導入、②ルーブリック表を用いた評価活動、③情報活用能力の育成の3つを推し進めてきた。

1つ目のALの導入については、主題に直接迫る授業改善の手立てについて取り組んだ。教科は国語に絞ったが、様々な教科で実践できるALは、現学習指導要領において最も有効な教育の手段だと思われる。紀要の冒頭でも述べたが、「今までの課題解決的な学習を、どの教科でもより丁寧に実践しよう。」「課題解決的な授業の流れで質と量を積み上げよう。」がALの特徴である。ALのイメージ図にあるように、児童に「学ぶ必要感」を与えること、そこが一番大切なポイントであり、必要感があるからこそ、「主体的・対話的で深い学び」につながられるのである。児童一人一人に「学ぶ必要感」を与えることは、非常に難しいことであったが、この1年間の実践で見えてきたことは、大きく分けると3つの実践に分かれる。「①児童がわくわくするような創作表現を入れること。②実態調査に基づく、児童の困り感からスタートすること。③ルーブリック評価を用いて、学習のゴールや内容が見える化し、何を学習するのかを児童も教員も明確にすること」であった。一方で、ALアンケートの結果に焦点を当てると、1学期よりも3学期のアンケート結果の方が、マイナスに転じている項目が多いのが残念であった。詳しい分析内容については、それぞれのアンケート調査結果にあるが、ALの授業に真剣に向き合った結果だと捉えている。来年度伸びるための過渡期と捉え、AL授業の浸透を促していきたい。

2つ目のルーブリック評価については、導入の成果と課題がはっきりと分かれた。ALの授業を進めるからこそ、評価意識を児童も教師も確実にもつ必要があった。評価意識が無ければ、「活動あって、学びなし」に陥りかねない。それを防ぐために共通理解を図りながら、協働的に学習を進めるためのルーブリック評価を導入した。導入の効果としては、「教師にとって指導内容が明確になり、指導がぶれずに単元を進められること」。同じく児童にとっても、「学ぶべきこと、目指すゴールがはっきりと理解でき、自分に何が足りないのかを明確にしながらか授業に臨めたこと」であった。課題として、作り方が難しかったり、使う文言を児童の言葉で上手く表現できなかつたりしたと言う点がある。また、同じルーブリック表で評価活動を行った際、教師と児童に評価のズレがあったことも挙げられる。ルーブリック表の一つの項目内で、さらに細かい評価の段階があり、実際に児童自身がどのレベルなのか曖昧であった場面もあった。このことから、ルーブリック評価がうまく機能すれば、大きな効果を発揮し、そうでなければ、評価を難しくしてしまっているという現状があることが分かった。（「2（3）ルーブリック評価」参照）

3つ目の情報活用能力の育成については、どの学年もICTを活用する場面を意図的に増やしたことで、飛躍的に伸びた。まず、本校のタイピングのスキルが中・高学年平均で3分間に224文字という実態である。これは、文科省が目標としている10分間に100～200字を大きく上回っている。中学年は、ロイロノートやスライドなどのアプリの活用がスムーズに行えるようになり、高学年は自らどのアプリを用いて学びを深めようか選択できるまでになっている。考えを速やかにまとめたり、発表したりすることが出来るようになってきているため、2年目としては大きな成果が表れていると言える。一方で、苦手な児童や低学年の段階では、どの時間にどのように練習を重ねていけばよいのかが不明確なため、来年度に整備をしたい。さらに、デジタルシティズンシップ教育を進め、情報や情報機器と向き合い方を考える時間の確保も本校の課題である。

来年度は、本発表を迎える。しかし、本研究は発表が目標ではなく、日々の教師の指導力の向上、児童の学力や望ましい人間関係の構築を目指すための研究である。今年度まで、共に研究を推進してきた先生方に感謝するとともに、4月からの新体制でも安達一寿先生ご指導のもと、2年間の積み重ねを生かして研究を進めてまいりたい。

（文責：富岡）